

2018年3-4月に開催された
"社会イニシアティブ"

世界フォーラム 特集号

3月末から4月初頭にかけての復活祭の週に、日本で「社会イニシアティブ」世界フォーラムが開催されました。桜咲き誇る身延山久遠寺での「プレフォーラム」と、目の前に富士山がそびえ立つ御殿場会場での「メインフォーラム」に分けての開催となりました。『くりあんさブラジル通信』89号では、このフォーラムについて詳しくご報告いたします。

フォーラムには民族や国籍、文化、言語、年齢や世代など、様々な意味で多様な背景を持つ参加者が、のべ465人も集まりました。この会のために来日した人や、日本に住む外国籍の参加者たちは両フォーラムを合わせると90人ほど、出身国は15か国にものぼりました。国内からも、北は北海道、南は屋久島まで全国各地から参加してくれました。中学生や高校生の参加者も多く、ブラジル学校や朝鮮学校、インターナショナルスクール、そしてあちこちのシュタイナー学校から100人ほどが来てくれました。

フォーラムのテーマは「エンパシー」。私たちが目指す「公正と友愛の社会」への道はエンパシーによって切り開かれる！ということについて考えました。考えるだけでなく、参加者同士が心を開き、体を使ってエンパシーを体験することができる、本当に心温まる会となりました。あの楽しく深い時間のことを、みなさんと一緒にもう一度振り返ってみたいと思います。



ブクリあん ズル通信 89

2019年1月発行



発行 CR・チルドレンズ・リソース・インターナショナル
代表 川原翼
編集 安藤将・青山蓉香・小貫大輔・西原里依・橋口博幸・星久美子
住所 259-1292 神奈川県平塚市北金目1-1 東海大学国際学科気付
Fax 0463-50-2407 東海大学国際学科小貫大輔研究室
E-mail criinfo@cribrasil.org
CRI - Children's Resources International (子どもたちのための国際的資源)

「くりあんさ」はポルトガル語で「子ども」「スペイン語で「子育て」の意。

表紙 / p.2-3 あの一週を振り返って 安藤将・小貫大輔 / p.4 愛の上に成立した会議 ヘンリー・サフィア / p.5-12 フォーラム振り返りプログラム / p.13-20 ワークショップ振り返り / p.21 私が見てきた世界とこれから生きる世界 吉川直人 / p.22-29 仏教と人智学の対話 岩間湛教 × ウチ・クレマー / p.30-33 教育の多様性は人類の未来のために 小貫大輔 / p.34-37 南アフリカの多文化学校とエンパシーを育てることの必要性 ジョーン・スリー / p.38-41 ウテさんとその仲間たちのトランスフォーメーション ウチ・クレマー × ヘジーナ × ヴァヌーザ × 大嶋敦志 × フローリアン / p.42-45 人工知能(AI)と人類の進化について ニカノール・ペルラス、秋元香里 / p.46-49 WSIF御殿場に参加して 渡澤比呂呼 / p.50-55 フォーラム参加者から寄せられたメッセージ / p.56-57 ブラジル「社会イニシアティブ」ユースフォーラム参加報告 西原里依 / p.58-59 「社会イニシアティブ」世界フォーラムのこれまで、そしてこれから 安藤将 / p.60-61 関連団体名・個人名一覧 / p.62 ゲーテアヌムの会報誌に掲載された記事 / p.63 「UNESCOユースセミナー」の開催 / 裏表紙 CRI会員募集・活動紹介



あの一週間を振り返って 安藤将・小貫大輔

3月、桜開花宣言が出た後に突然の雪が降った。フォーラム開催の一週間前だった。世界中から参加者の集まる世界フォーラムが、いよいよ始まるうとしている。

雪は一日でやみ、春の足がぐんと早まった。フォーラム前日、海外からの講師が山梨入りした日には関東満開宣言。酔うほどに桜の舞う中、甘草屋敷、昌福寺、みたまの湯を経由して身延山に入る。樹齢400年の夜桜に迎えられ、しばし誰もが立ち止まる。

2日間のプレフォーラムは、日蓮宗の総本山久遠寺を仰ぐ身延山大学。お辞儀と握手とハグとキスのアイスブレイクが、三々五々集まる参加者を迎える。笑顔を誘う。講堂に移動してからは、一転して荘厳。般若心経を舞うオイリュトミーで幕を開ける。そうそうたる講師陣には、通訳チームが数人がかり。通訳とは世界にエンパシーを広める奉仕者なり。深く深く感謝。

3日間のメインフォーラムは、御殿場の青年施設。続々と到着する新しい参加者は、その多くが

中高生や大学生。カポエイラのホーダ(輪)と竹のアートの中に吸い込まれていく。たくさんの講師、たくさんのワークショップ。ふ、と緊張がとけると、ウテさん80歳の巨大な誕生ケーキが歌とともに会場に運び込まれてくる。

人が集まるとソーシャル・オイリュトミー。夕方のお会いのワークは、ギターを先頭に、80歳の女性に手を引かれた百数十人の川となって会場をあふれ出ていく。翌朝も、富士の足元で巨大なサークルダンス。歌う、踊る。踊る、歌う。

御殿場の2日目、それは復活祭の日曜日だった。講師たちは、口々に「トランスフォーメーション」を語っている。変革は可能だ！イエスキリストが肉体を離れたように？蝶がさなぎを破るときのように？そんなすごいこと、自分にはできるんだろうか？自分の意志で「死ね」ってことか？生まれ変わるために？

知らない世界に飛び込んだとき、自分を受け止めてくれるのはエンパシーだと語る人がいる。誰のエンパシーのことだ？

……いや、考えていた。自分自身のエンパシーから始めてみたらどうだろうか、って。



御殿場は富士。中空に浮く白い山に誰もが圧倒された。



千年桜の下、静寂のうずまきサークルダンス。

愛の上に成立した会議

ヘンリー・サファイア

日本で開催された「社会イニシアティブ」世界フォーラムは、私の人生で他に例を見ない経験でした。私が今までに参加した国際会議の中でも、最高に喜びに満ちた、そして最も成功した異世代間の出会いだったと言えます。詳細は後に回すとして、まず一番最初に言いたいことは、「これは、愛の上に成立した会議だった！」と言うことです。センチメンタルな、あるいはロマンチックな意味ではなく、精神的な意味での愛です。

会議が進むに連れて私は気がつきました。国、文化、宗教、そして社会的な違いを超えてスピリチュアルな意味での兄弟姉妹たちが、ここで出会っているのだと。誰もが心を開き、関心をもつ



ヘンリー・サファイア

社会活動家／社会セラピーワーカー
／シュタイナー教師(物理)
現在、人智学系コミュニティ施設で織物ワークショップリーダー

て、世界をよりよくするために貢献しようとしていたのを感じました。私たちは、人間を人間として尊重するという共通の価値観のもとに結ばれていました。そうであると同時に、私たちの間の違いを喜び、尊重していました。私たちがお互いから学ぶことができるのは、まさに私たちが同じではないからこそであり、違う存在であるからこそなのです。

このフォーラムは、多様な年齢層の人々が集まったという意味において、私が経験したことのあるどんなフォーラムと比べても際立っていました。15歳から80歳までの人が参加して、バランスよほどの年齢層からもたくさん参加者がありました。若者たちは経験者たちから学ぶことを望み、同時に同世代の人と共にいることを楽しんでいました。年配の人たちは若者が関心を持つことを高く評価して自分の経験を喜んで共有し、また若者たちの心に宿るものに深く興味を持っていました。自分が全てを知っているとか、答えを持っているなどと考えてる人は誰もいませんでした。

日本のワーキングチームがこの一年間、いかに

力を合わせてきたのかがよくわかります。彼らは

豊富な洞察力とスキルと経験でよく働き、その能力を無償で提供してくれました。彼らの行為はまさに愛の行為でした。彼らは、共に働いてはじめて実現できるものを愛しているのです。彼らの間の深い関係は、フォーラム以前から続いている様々な活動やユースの集まりを通じて構築されたものでした。特に、日本とブラジルの間の関係、モンチアズールでのボランティア活動や日本に住むブラジル人との交流があったことが、このフォーラム成功のための強力な柱になったのです。シュタイナー学校ばかりでなく、たくさんユネスコスクールやインターナショナルスクール、外国学校などから参加がありました。広報のためにはソーシャルメディアも使用されたでしょうが、基本的には、直接的な出会いの中から参加者が集まってきたのだということがよくわかりました。

この会議が、多くの人々の献身的な「愛」によって支えられていたことが、その成功の秘密なのだと思います。参加者の一人として心からの感謝を述べたいと思います。

フォーラム振り返りプログラム スタッフによる日記風記録

DAY 0 3月28日

13:00-13:30

山梨塩山駅に集合

お昼を食べ、建物内のひな壇を見学。

15:00-17:00

岩間さんのお寺見学

減多に見られないお寺の中ツアー。特に本堂のきらびやかな装飾や彫刻、色使いに興味深々！海外ゲストにとっても、日本人にとっても、とても貴重



な体験になったはず。

本堂の裏にもうひとつ

お堂があって、その中

に様々な土着の神さま

が祀ってあったのが印象的。お寺がある地域

は日本の少数民族（？）

が多くいた地域で、本

堂の仏像は建前、裏では自分たちの神さまを

祀っていたという話が

すごかった。裏のお堂

は色も赤黒のような異

文化を感じる配色で、

かなり怖い顔の像がた

くさんあった。外国人

ゲストが、岩間さんは

自ら選んで住職を継い



だのかと突っ込んで聞いていました。



16:30-20:00

外国人参加者の

温泉初体験と夕食

海外から到着したばかりの人も多く、疲労感があつたはずだけれど、スタッフを含め総勢50名で温泉、夕飯をいっしょに堪能。宿坊に布団をたくさん敷いてもらつて、おやすみなさーい。

DAY 1 3月29日

10:00-12:00

自己紹介のワーク

世界中からやってきた参加者が続々と身延山に入ってくる。車で来る人、電車やバスで来る人……。ドキドキしながら、慣れない土地に不安を感じながら、満開の桜の山に登ってくる。そういう人たちが、リラックスして、楽しく、そしてエンパシーを体験できるようなフォーラムにするには、参加者間のファースト・コンタクトはとても大



青山 蓉香

2011年のモンチアズールボランティア。現在はCRIのメンバー。普段は藤野シュタイナー学園などで英語を教える。



星 久美子

2009年 カノアケブラーダ / 2017年 モンチアズール(シャカラ)でボランティア。CRI事務局担当。

13:00-13:30

般若心経のオイリュトミー

はたりえこ／角田萌

果／斉藤大法

はじめて聴く「般若心経」。はじめて観る「オイリュトミー」！一

見、まったく異なる二

つだけど、そのコンビ

ネーションは美しく、

華麗で、吸い込まれそ

うだった。講堂いっぱ

いに響く大法さんの

お経、きれいな淡い色

の衣をまとって舞う

二人の女性。一気に神

秘的な空間に誘われ

てしまった！



13:30-14:00

開会の言葉

吉川直人／貴家勝宏
東海大学の吉川直人先生のお話。国連勤務当時の経験と世界の貧困について。特に海外からの参加者は聞き入っていた。ニカノールさんは、最近出した本に吉川先生のスピーチの一部を引用するほど。

14:00-14:45

社会イニシアティブ
世界フォーラムと世界各地でのプロジェクト
ジョーン・スリー
南アフリカ出身、スイスのドルナツハで活動しているジョーンさんのお話。フォーラムのテーマである「エンパシー」が今世界が直面する問題を解決するのにどんなに必要とされ



ているか。自分を保ちつつ相手に向かって心を開くエンパシーの大切さ。2000年にゲーテアヌムで開かれた会議で提案された「社会イニシアティブ」世界フォーラムの変遷、前年のインドでのフォーラムについて紹介していただきました。

15:15-15:45

人生の出来事としての長期ボランティア活動
ルドフ・ジュタイナー教育芸術友の会の経験
クリスチアン・グレッツィン
ガー／クリストフ・ヘルマン
世界へ出ていくドイ

ツの若者を応援するフロインデという団体の紹介。モンチアズールにもたくさんボランティアとして派遣されています。日本にもそんなものがあればいいのかな。

15:45-17:00

モンチアズールの経験とトラウマの教育学
ウテ・クレーマー／ネルソン・アヴェーラ
モンチアズール育ちで6ヶ国語を操るキーコがスピーチ。だれしもがダイヤモンドの原石を秘めていて、モンチアズールはその原石を磨く



ためのチャンスを彼に与えてくれたのだそう。「モンチアズールの英語教室でまっさ(当時のボランティア)に英語を習った」と話す、会場から「あのままっさの英語でえ?」と声が上がりが笑いが漏れる。すかさずウテさんは「大事なことは、誰もが完璧である必要はないということ。それぞれが持てる能力を発揮できることが大事なのです」と発言。ウテさんの叡智に会場から大きな納得の反応が上がりました。



18:00-20:00

夕食とワールドカフェ

宿坊の一番広いお部屋(本堂)で、東海大の学生さんに給仕をしてもらって和食のコース料理を食べる。鍋、天ぷら、湯葉……かなり豪華! 湯葉を外国人ゲストに説明するのに一苦労。食事が一段落したところで、テーブル毎にお題が出されディスカッション。お互いの国や文化を知り交流するきっかけに。有志



の発表のあとに、タイ式の「ごちそうさま」で閉会。

DAY 2

3月30日

8:00-9:30

久遠寺の見学

かなりの大所帯で久遠寺を見学。久遠寺までは、数百段の石段を上るルートと近代的なゴンドラルートに分かれる。石段を登り切ると正面に本堂が。広場で皆で手をつないで大きな輪をつくっていたりしているうちに時間がどんどんなくなりツアー



は駆け足しで終了することに。佐渡で流刑を終えた日蓮上人によって開山された由来、五重塔のお話などを聞くことができました。

10:00-12:00

仏教と人智学の対話
岩間湛教／ウテ・クレーマー

ウテさんと山梨県にある日蓮宗昌福寺の岩間湛教さんの対談。

仏教では土埃でさえ仏に生まれ変わる可能性があるが、人智学では人間は自我があり人間ならではの使命があり人間にしか生まれ変わらないという理解。それでも、日蓮大聖人とシユタイナーの言っていることの中にたくさん共通点が見つかり、この異色の出会いは参加者たちの中で新たな議論のテーマとして受け入れられました。

13:00-14:00

人工知能の時代におけるエンパシー、人智学、そして社会三分節
ニカノール・ペルラス
AI(人工知能)が人類に与える影響を科学的データを使って説明してくれました。正

直、難しかった! 時間が足らなくて、人類危機の奈落の底で講演は終わる。果たして希望はもてるのか……?! SNSの危険性を散々訴えられたので講演後の連絡先交換でフェイスブックアカウントを聞くのが気まずそうだった笑。



メイン・フォーラム 御殿場

DAY 1

3月31日

10:30-12:00

体と感覚を使ったワーク

●カポエイラ

ブラジルの伝統的格闘技ダンス

群馬在住のカポエイラ集団が遅れながらも参上！ピリンバウ（ビョウタンを使った弦楽器）のビロンビロン



という音に吸い寄せられるように、人々が集まってきました。

輪をつくり、その中で1対1で繰り広げられるアクロバティックな動きは、音と歌、手拍子に合わせて繰り広げられる軽快なダンスのようにも見えるけど、その迫力と飛び散る汗から「格闘」という力強さがびんびん伝わってくる。参加者のほとんどは、

カポエイラに初挑戦。見ている側もトライする側も、その高揚感の中に包まれ、会場の温度は一気に上昇！3月なのに窓全開で盛り上がりました。

体と感覚を使ったワーク

●竹のアート

五角形を立体的に竹で表現する

実は、五角形には黄金比が潜んでいる！黄金比を立体的に表現



した星（スターケージ）を長さ2mの竹30本を使って5人一組のグループに分かれて制作しました。輪ゴムと竹のみを用いて作製するため、思考力とチームワークが重要視されるのです。5グループそれぞれの個性あふれる作品が完成すると、互いを称えあい、賞賛を送りあう姿が見られました。



13:00-13:30

オリエンテーション

オイリュトミストのみつちーこと関倫尚とモンチアズールから来ているキークによる「Me, You, Weecee」のワーク。2人の掛け合いがとってもウケてました。左の写真（右）は、はじめまして、の隣りの人といっしょにちよつと恥ずかしながらもYounuuu!!!



14:00-15:15

講演1 南アフリカの多文化学校とエンパシー

を育てることの必要性ジョーン・スリーエンパシーについて、「人としての心を開いて他を受け入れること、それはあたかも子どもの模倣のごとくではあるが、しかしエンパシーというときには意識してする模倣である」と話されました。

この言葉にワークシヨップ講師の角口さんはエンパシーとは……をはつきり理解したそうです。

お話のあとに登場したウテさん80歳のケーキは、なんと特注！ブラジルの味をと思つて、群馬に住むブラジル人のやつているケーキ屋さんに



注文して作ってもらいました。マラクジャ（パッションフルーツ）のソース、ココナッツが美味しい！

参加者は「私にも！」と口々にウテさんの周りに集まり、切り分けて食べました。あつという間に完食！

15:45-17:00

講演2 教育の多様性は

人類の未来のために

ー日本と世界における

数々の取り組みー

小貫大輔

外国籍の子どもたちを取り巻く日本の学校教育の現状に、会場



はびつくり。参加者の中には初来日っていう人も何人もいましたが、日本人であつても知らなかった……という人も多かったのでは？

「憲法には日本国籍をもつ子どもの教育が保障されている、と書かれている」日本国籍をもっていない外国人の子どもの教育が保障されていない、学校に行かなくてもいい」という話。シュタイナー学校をはじめとする国内のオル

タナティブ学校、朝鮮学校やブラジル学校、インターナショナルスクールなどの外国学校、実は多様な学校が日本にはあり、そのほとんどが「学校」として日本政府に認められておらず、公的な援助が受けられず経済的にとっても大変という話。このような学校からたくさん高校生が参加していたので、「うんうん、そうなんだよ！」って頷いていた人も多いんじゃないかな。

チェックイン

スタッフMTG

ロビーに行ってみると、ブラジルから参加しているスタッフの指揮で翌日やるつもの「シランダ（輪になって歌いながらくるくる



回る踊り」の練習が始まっていました。

ギターも加わり盛り上がりつつあると、周りでお喋りしていた人たちの手を次々に取って、輪に招き入れ、どんどん大きくなっていきました。巨大な円になったシランダは、遂にロビーを抜け出し外へ。

ウテさんを先頭に、手を繋いだまま一列になって、歌いながら食堂を目指します。ガラスのドアを開けて食堂に入ると、シランダ

は何人かをまた吸収し、さらに長い列になって踊り進みました。さらに巨大化していくシランダ、手と手をとって仲間を増やしていった私たち。この感覚、モンチアズールが日本に来たつていう感じ！ウテさん、モンチアズール最高！

19:00-20:30

クリエイティブな出会い1

出会いを深め、重要な問いと経験をシェアするワーク

Social sculpture

入口で一人一枚、折り紙をもらいました。同じ色同士の人たちでグループをつくったので、国籍や年齢など、ランダムに分かれました。それぞれのグループのファシリ

テーターのサポートを受けながら、フォーラムで学んだことを動きで表現することに。どのグループも個性たっぷり！人数も多くて、かなり迫力ある発表に仕上がっていました。皆で話し合いながら、しかも短時間で、発表できるかたちにしていくのは大

変だったけど、見ている側もエンパシーの力が発揮されて、会場はとても温かい雰囲気。

DAY 2 4月1日

7:00-7:20

国旗掲揚・ラジオ体操

(朝のついで)

眠いし、寒いし……でも、澄んだ空、圧巻の富士山を目の前に拝みながらのラジオ体操は、早起きしたことを決して後悔させませんでした。



いけれど、時間通りに終わりそうにない！でも、17時からの「夕べのつどい(会場施設主催の交流会)」には遅刻できない……。ベイジョ・メ・リーガの学生たちを各部屋に派遣して、「あと10分で終わらせてください」とファシリテーターに言いに行くという「空気の読めない」役をやってもらわなければいけない……。そう苦渋の決断をせざるを得ない時。突然、黒い雲が現れ、

8:30-10:00

世界各地からの

社会活動紹介

あれ……。？プロジェクターが動かない。朝一のプログラム、よくある機材トラブルです。そんな隙間の時間だって1秒たりとも無駄にはしません！あちんのギターで Sai, sai, saia piaba をみんなで大合唱！隣の人たち同士でハグし合って、会場が一体に。なんだかモンチアズール恒例の木曜ミーティングにいるみたいな雰囲気。そのうちに機械の機嫌が直って、みんな大満足



の中、プログラムがスタート！



10:00-11:30

講演3 変革は可能だ！

「国際的な文化のセクターとなったブラジルのスラム」

ウテ・クレマー

モンチアズールで育ったヘジーナ、ヴァヌーザ、キーコのモンチアズールでのそれぞれの経験を聞きました。貧しさや、機会の少なさといった子ども時代の話、モンチアズールとの出会いがどう自分の人生を変えたのか、どう自分自身を変容させたのか。その語りは涙を誘うものでした。

DAY 3 4月2日

記念撮影・シランダ

雨が！なんと天が味方したのだ!! 間もなく、「夕べのつどい、中止」を知らせる館内放送が流れた。私はベイジョの学生たちと思わずハイタッチ！(笑)これにより、盛り上がりつつあるワークショップに水をさすことなく、気持ちよく延長してもらうことができました。

19:00-20:30

ワークショップB

10のワークショップ(Aの時間帯から連続しているもの4つを含む)を用意しました。参加者には自分が希望する物を選んでもらい、各々の部屋へ移動。それぞれのワークショップの報告については、12ページを見てください。

南アフリカで孤児を

支援する活動をして

いるフローリアンが

コメント。

「モンチアズールがファヴェーラの子どもたちに『機会』を与えてくれたから、こうしてヴァヌーザやキーコ、ヘジーナがここにいる、というだけではないと思うんだ。その『機会』を利用した本人の選択があったから、そして、そういう選択が積み重なって、今に至ったんだ。」

彼は、南アフリカでも、せっかくのチャンスを台無しにして、活動から脱落していく



アイスブレイク

実は、まだ出会っていない、話したことがない人たちがいるはず。そう思って、最終日の朝にもう一回アイスブレイク！音楽を流して、部屋を歩き回ります。音楽が止まって「2人組」と声をかけ、参加者は近くのひとと2人組になり、お互いの共通点を探します。音楽が再度始まり、さよならをして歩き出し、しばらくしたら今度は「3人

子どもがいることを会場のみんなにシェアしてくれました。

コーヒー・エクササイズ
みっちー(関倫尚)に再登場してもらい、「ハレルヤ」をオイリュトミーで体験。ずっと座っていて強張ってしまった身体をほぐして、気分もリフレッシュ！



13:00-14:30

講演4 エンパシー、人工

知能と人類の未来

ニカノール・ペルラス

人類が直面しているAIの危機について、

組」。これを繰り返す、最後は5人組くらいまでやったかな？組の人数が多くなるほど、共通点を見つけるのはもちろん難しくなり、どんどん盛り上がります。高校生も大人も、みんな楽しそうだったな。

8:30-10:00

クリエイティブな出会い2

出会いを深め、重要な問いと経験をシェアするワーク

5〜6人のグループに分かれ、フォーラムのふりかえり。歳もちがえば仕事もバックグラウンドもちがう人たちといっしょに、

1 フォーラムの

中でのハイライト

2 湧いてきた

疑問やアイデア

3 フォーラム終了後、



何が今起こっているのか、何がこれから起こると予想されるのかについてのレクチャー。

ふだんは常に笑顔に溢れ冗談満載でポジティブなニカノールさんが別人のような真剣な顔になったのがとても印象的。緊迫感と危機感がひしひしと伝わってきました。難しい内容だったため、二人三脚もとい三人四脚で通訳。それでも時間が足りず、レクチャーは希望の光を見ずに終了。

15:30-17:00

ワークショップA

ワークショップが盛り上がりつつあるのは良



ここでの学びを
どう活かして
いきたいか

という3つについて話し合いました。特に今後のアクションが人によって異なり、その多様さがとても新鮮だったよう。話し合う場所も部屋の中だったり、芝生の上でリラックスして話を進めていました。

10:30-12:00

小グループからの発表

【参加者からの自由な発言／フォーラムの今後の目標やビジョンについてのディスカッション】

各グループからどんなことが話し合われたのか、発表。グループで作ったポスターや画用紙を壁に飾ったり、他のグループの話の聞いたり。シェアすることで更に学びが深まったようです。



閉会の言葉（踊り）

スタッフ紹介、ずっと裏方としてフォーラムを支えてくれたベイジョ・メ・リーガの学生たちの紹介。ありがとうの拍手で会場は包まれました。そのとき、ブラジル音楽、フォホーが流れてきました！ウテさんは大輔さんを引っ張ってきて踊りだしました。その後は、代わる代わるいろんな人が輪の中に入り、踊って、会場で踊りはじめました。サイコーに楽しい空間がまたもや出現！まさに「フィナーレ」!!



ワークショップ振り返り

ワークショップA 15:30-17:00

ビオダンサ（命の踊り）

内田佳子／小貫早苗

さまざまなリズムやメロディーによって動きだす、体と心から生まれる波を、裸足になりリラックした状態で感じます。動きを通して人とながつたり、自分を表現したり、他の人が表現したものを受け取ったりしました。後半は、ゆったりとしたメロディーの中で、より静かに、やさしく、互いに近づいていく場面が印象的でした。言葉でのコミュニケーションを越えた人と人との出会いを体験しました。

講師からのメッセージ

参加してくれた方の中には、キャンプでいつも一緒に踊ってくれているブラジル人の高校生や東海大学の学生さんいれば、初めて参



加されるシユタイナー学校の保護者の方、他のワークショップの講師をしてくださっている方々と、バックグラウンドもさまざまでした。フォーラムそのものが、まさに多様性の豊かさとの出会いの飲みに満ちていたからでしょう。か、ダンスが始まってからは、みなさんのオープンな弾けつづりがすばらしく、始まってほどなく、汗だくになる方もいらつしやいました。

私たちは長年ビオダンサを通して自分が変容していく道を通ってきたわけですが、フォーラムでは主に話を聞く中で、スピーカーと参加者との共感があのようなエネルギーを生み出して、全体を巻き込んでいくさまを体験して、何をするかではなく、人が集まることがなによりも大事なのだと思います。

カポエイラ

ウィルソン・リマ／マンデラ

人類の無形文化遺産であり、世界にポルトガル語を広める一翼を担っているカポエイラの体験です。カポエイラの歴史、ダンス、音楽を学びます。ビルンバウ、アタバキ、パンデイロ、アゴゴ、ヘコヘコなどの楽器を演奏し、歌いながら、実際に2人組をつくりダンスの実践をしました。



私たちの身の回りの世界を考えるサイエンス

ヘンリー・サファイア

科学者であり、シユタイナー学校の教師、エンパワメントの専門家、ヘンリー・サファイアによる科学ワークショップです。電気と電話の実験を通して、観察・理解することの楽しさを学びました。授業形式で進められ、参加者は熱心にメモを取りながら、科学の面白さを体験しました。



日本昔ばなし 人形劇と言語芸術

角口さかえ

日本の昔ばなし「花さかじい」を題材にしたテール人形劇です。人形の動かし方、語り方を学び、話し手と聞き手の間に起こる一体感（エンパシー）を体験しました。和やかな雰囲気の中、参加者自らがお話のフリーズに合わせて場の呼吸を感じることに、むずかしさと楽しさを共有しました。

講師からのメッセージ

「花さかじい」のテール人形劇の準備を始めていると、部屋に誰かが入って来ます。そろりと近づいて来て、ずっと顔をみればなんと30年前に会ったきりのお友達がドイツから訪れていました。彼女はいま、「シユタイナー教育友の会」の本部に勤めているのとことで、久々の日本を楽しみにしていました。その彼女の同僚（ドイツ人）が、日本の人形劇を楽しむに観てくださいました。もちろんその他にも10人ほど参加者がありました。知り合いの白石さんが、ドイツ人の彼にも内



トラウマケア

自我の回復へパステルのアートワーク・マッサージ・空間のエクササイズ

竹内真弓／小林由香／宮田文子／天鼓

傷つき、ダメージを受けた緊張のほぐれない心や体をゆつくりと回復させていくことを目的としたワークです。「エンパシー」をもとに「他者との関係」を意識できるものとして全体を組み立て、言語を必要としない動きなどを通して体験しました。さまざまな年代の参加者が集っており、終了後、参加者の表情がとても柔らかくなっているように見えました。

講師からのメッセージ

本来的には被災者に向けて行なうワークショップですが、今回は一般の方々のトラウマケアへの理解が主眼であったこと、さらにフォーラムのテーマの「エンパシー」をもとに「他者との関係」を意識できるものとして全体を組み立てました。やや内容を詰め過ぎてダイジェスト的になったのは反省の余地があり



容の筋を分かりやすく通訳して伝えてくださったおかげで、日本語での人形劇「花さかじい」をとても興味深く観てくれました。その後には参加された皆さんと語りの練習もいたしました。人形劇の分科会もエンパシーというテーマで行われましたので、私は参加者の皆さまにまずお願いしたことがあります。「人形劇を演ずる私に対して、心の目、心の耳を開いて集中してくださいね。」と、この一言をはっきり言えたことが、つまりジョーン・スリーさんの講演を聞いて確信をもてたことによります。とてもありがたい感じ入りました。

このような貴重な学びの機会が誰にも提供されていることは素晴らしいことです。多くの方々の無償の働きがくりあげたフォーラムは、ずっと消えない貴重な体験でした。

身体表現のアート

角田萌果／浦上裕子

頭を休めて体をたくさん使ったワークショップでした。動物的な動きを体験して「儀式」をつくり、発表し合いました。笑いたかったら笑う、あくびをしたかったらする、といった指導を受けた参加者は、自らを解放させのびのびと楽しく取り組んでいました。後半は動きの早さでストーリーをつくるエクササイズなどをおこないました。

ましたが、参加者の方々はひとつずつの体験を真摯に取り組んでくださいました。終了後、参加者の表情がとても柔らかくなっていったのが印象的でした。思ったよりも若い参加者が多く、トラウマケアや災害のボランティアワークへの関心の高さは、私たちにも嬉しいことでした。グルーブのダイナミズムはバランスが取れていたように感じました。長くアントロポゾフィになじんできた参加者には、目新しさはなかったかもしれませんが、参加していたシユタイナー学校の生徒に「自分たちが教室でやっていたことがトラウマケアにつながっていたんですね」という感想がありました。学校での魂に呼びかける授業の体験が、災害時に応用できることが伝わったようです。

ワークショップB 19:00-20:30

カポエイラと人智学

不公平から世界のポジティブな変容へ。不平等が世界をポジティブに変容する

ネルソン・アヴェエーラ

講師からのメッセージ

カポエイラとアントロポゾフィ（人智学）との関係を通して、日本のアントロポゾフィ関係

講師からのメッセージ

内容は動物的な動きを体験して「儀式」をつくり、発表すること。そして、俳優の訓練に近い、単純な数種類の動きだけでシーンを作っていくエクササイズをしました。身体を使って表現すること、創造力を使って遊ぶことは得意な人が多く、みなさん楽しんでいただけようです。参加者の中に今回のワークショップでやったようなことが初めてだった人がいたのですが、その人が周りの人たちに影響されながら身体を少しずつ動かし、徐々に自分の中にある羞恥心を乗り越え、普段なら全くしないことにチャレンジしていく姿がとても印象的でした。

日本に住んでいると特にかもしませんが、人は頭だけで生活していることが多いように感じます。心を表に出すことを恐れ、普段使う限られた動きとは異なる動きをすることを恐れ、冒険することを恐れている人が多いです。ですがそのような人々が形成する社会では、エンパシーは生まれません。どんな方法でも良いのですが、芸術は身体と心と頭を繋げ、さらに「自分」と「他者」、「我々」と「彼ら」を繋ぐことができる最も有効的なツールだと強く再確認しました。



者が新しいものをいかにして受け入れるのか、ということを見ることができたことは、とても喜ばしいことでした。

リズム、歌、歴史、身体の動きをミックスすることは、人間の諸行為——考え、感じ、行動すること——と親和性が高いものです。このように、アントロポゾフィのことを聞いたこともなかった多くの参加者も、スピリチュアル・サイエンスにおいて研究されているこの基本的要素を実践し体験することができたと思います。日本のカポエイラグループ、トリボ・ダ・ルアがワークショップを手伝ってくれ、みなとても楽しんでくれました。

マパムンディ

世界の文化的多様性、グローバルな出来事と未来についての気づき

ホアン・ファクンド・ポテロ／アンドレア・デ・ラ・クルス
アイデンティティの大切さ、おもしろさを教えてくれたマパムンディのワークショップはとっても

とてもおもしろく、エンパシーして他人を知ることでもできたし、自分のアイデンティティをもっと知りたいなと思うきっかけにもなりました。今まで考えたこともないことでした。私は今までどちらかというとヨーロッパやエジプトといった自分のルーツとは関係のない地域に興味がありました。が、マブムンディを知って自分のルーツである日本と中国のことをもっと知っていく必要があると感じました。それを知らずにエンパシーばかりしていたら自分のことを失ってしまうにそうだし、自分のことを知っているということにならないと思っただけです。世界に出るために自分の今するべき事を感じるきっかけになり、フォーラムに参加していなければ未来の自分はもしかしたら、全然違う人になっていたのかな？とも思いました。（一般感想より）

瞑想と内的発達を通し自己の覚醒した意識をはぐくむ

ジョーン・スリー

人智学をもとに、私たちの精神的潜在力を日常生活の中で目覚めさせていくことを目的としました。観察や知覚力を使った簡単なエクササイズ、対話やディスカッションを通してお互いの考えや理解を共有します。他者と交流する開かれた心と探

求心があればどなたでも参加できるようなワークショップでした。



目に見えない人間関係が見えてくる！

働く場所(社会生活)におけるオイリュトミー

関倫尚

木やフェルトのボールを「仕事」に見立てて、隣りの人に渡します。このエクササイズでは現実世界で自分がどのような態度をとるのが如実に現れます。これは、もはやゲームや遊びではなくまさに「仕事」です。頭で「エンパシー」を理解するだけではなく、体を使うことでより深く体験することができました。

講師からのメッセージ

エンパシーというテーマのもと、16歳から77歳までと幅広い年齢層の13人の参加者が集

原発問題・核問題を考える

宇野朗子

原発事故は今もこの国で進行し、生態系に、社会に、人々に、深く影響を及ぼしていながら、それらを見ること、語ることが益々難しくなりつつあります。ともにこの時代を生きる当事者として、この巨大で複雑な問題について考える時間をもちました。福島の実状や参加者の体験談、想いをディスカッションしました。写真家・中筋純さんの福島の写真展示もおこないました。

講師からのメッセージ

ほぼ定員の28人が集まりました。このうち8人は、被災地や避難先で被災者支援等をしている「当事者」で、青森、宮城、千葉、東京、京都、岡山などからこのフォーラムに参加していました。また、ドイツ、スイス、フィリピンなど海外からの参加や、在日コリアンなど、文化的にも多様で、また年齢層も幅広く、高校生からシニアまでが集いました。

ワークショップは、まず私から、この原発事故の7年に、起きたことを大まかに想起してもらうための短いお話をしました。福島原発事故は、地球規模に影響を与える生態学的大惨事であること。今日日本で起きているこの史上

最大の公害事件によって、未来世代も含め膨大な数の人々の人権が侵害されていること。放射能汚染に対してのこの国の政府の解決策は、人々が被ばくを受け入れ生活すること、被ばくの悪影響については極力不可視化することであり、被災者の多くはそれを望んでいないこと。現在、原発事故の影響を大きく受けた地域の住民は、被ばくに対する有効な防護策についての支援もなく、賠償もほとんどなく放置されていること。避難指示が出た地域の住民は、早期の避難指示解除によって、変わり果てた故郷への帰還を促され、避難指示の出なかった汚染地からの「自主」避難者は、住宅提供打ち切りなどによって追い詰められ、自死者も出ていること。政府はさらに各地の原発も再稼働させていっていること。こうした状況のなかで、多くの人々の努力によって、裁判や汚染マップ作成や保養などが行われてきたこと……。

その後、二人の方の事故発生当時のお話に皆で耳を澄しました。そして3、4人のグループに分かれ、これまでの話を聞いて、心に浮かんでいることなどを話し合いました。どのグループも互いに心を開き、熱心に話し合っている光景は、感動的でした。これは、このフォーラムがそれを励まし続けてくれたか



まり、真剣に喜びをもってエクササイズに取り組んでいただけだったので、大変素晴らしい時間になりました。心の柔軟性を高めるエクササイズ「We（私たち）」「You（あなた）」「私」では、「We」の関係性は日常的には会社やコミュニティでの大勢の仕事と、「You」の関係性では家族や親しい友だちと、そして、「I」の関係性では自分自身と繋がっています。「We」、「You」、「I」のバランスが大事になります。私たちは働く必要がありますが、同時に家族との時間も必要です。そして、私たちは自分自身と向き合う時間も必要です。このエクササイズでは、一人ひとりが仕事、家族、自分自身とのバランスが現在どのような状態なのかを知ることが助けてくれます。

特に今の時代は、「I」の自分自身と繋がること大切です。私たち人間は自由な存在です。そして、それと同時に私たちは世界の人たちのために大きな愛を持って働くことができます。このフォーラムの中でこの方々と一緒にワークできたのは、私にとっても素晴らしい楽しい時間でした。感謝しています。

らこそその時間だったと思います。この日の午後ニカノールさんが熱く語った、「コンフォートゾーンから一步踏み出し、人類として解決策を見い出そうとすること、暗闇の中で一步踏み出す勇気を持つこと」という言葉に励まされ、私たちはほんの短い時間でしたが、出会い、伝え合う時間を持つことができました。

ワークショップ終了後、中筋純さんの解説つきで、皆で被災地の写真を観ました。

福島第一原発を捉えた、長く長く続くグレイのあの光景は、私たちが立つこの場所と地続きです。そして私たちはどこにいても、頭上に太陽の光を受けています。私たちがこの現実を真摯に受け止めようと努力するとき、私たちはこの悲劇から何かを生み出すことができます。心を開き勇気をもって参加してください。皆さん、本当にありがとうございます。それぞれがまた、それぞれの模索の旅を続けていきましょう。



竹の音楽と 幾何学のアート

日詰明男／松本夏樹

初日に行われた黄金比の星籠づくりのデモンストレーション、「社会造形（Social Plastic）」の理念を議論することを通し、現代社会における新たな可能性を探っていくワークショップです。後半では、シンプルな竹の楽器を作り、きれいな音色でポリリズム音楽を演奏しました。多様なリズムを融合させ、言語とはちがうコミュニケーションを体験しました。



人生の体験から社会的な他者への愛を育む

ヴァヌーザ・コウチーニョ／ヘジーナ・ラッセ

社会開発とその支援について人々の意識を呼び起こし、行動につなげることを目的としたワークショップです。セッション1では聴く、観察する、創る、セッション2では表現する、演じる、終わりの、6項目に合わせておこなわれます。輪の中心には貝殻でインフィニティ（∞）が描かれ、「自我を捨て、他者への愛をみつける」ための練習がおこなわれました。

講師からのメッセージ

まずはじめに、私たちのワークショップに多くの若い人たち（とても若い）が参加してくれたことに驚いた、ということ言いたいです。複雑なテーマだったので、私たちはもっと年配の人たちが興味があるだろうと予想していました。しかし、蓋を開けてみると参加者の大部分は中学生と高校生でした。生きている中で、エンパシーの真の意味を探しに来た一〇代の若者たち。彼らはエンパシーについて理解し、いかに実践すべきか考えたかったでしょう。そしてワークショップのふりかえりの際、私たちはより驚かされることになりました。

講師からのメッセージ

約25名の参加者たち（主に日本人）の興味は「いかにして人生の困難やトラウマを建設的にトランスフォーム（変革）できるか？」というものでした。そこで、モンチアズールのスラムの人間的な変革を例にあげました。この例に対して次のような質問が、参加者と車座になって話し合った中で出てきました。

- ・自分自身の変革と自分の周囲の変革にはどのような相関関係があるのか？
- ・私の精神生活は他の人々を癒したり救ったりすることとどのように変革がもたらされるのか？
- ・モンサント（巨大農業・種子企業）の農業への影響にどのように対抗し得るのか？
- ・自分自身のトラウマを変革し、そのことを通して他人をより効果的に助けることが出来るだろうか？
- ・私（ウテ）のモンチアズールでの経験は日本の幼児教育に対してどのような価値があるのか？

当然、すべての質問に完全な答えを出すことは不可能です。ですが、次のような状況においては希望と自信を与えることができたように思います。それは、個人と共同体をより



参加者には急かさずに自分のタイミングで話をしてもらうようにし、ワークショップを慎重に進行するよう務めました。そのため、時間の都合上、いくつかの内容をカットしなくてはいけませんでした。

核となる問題提起は「人生を理想から社会の発展へどうトランスフォームするか？」であり、目的は「人々を社会の発展のために目覚めさせ、敏感にし、巻き込み、彼らの実践を支援すること」です。はじめに、とてもシンプルな質問から始めました。

- ・あなたの出身はどこですか？
- ・何をしている人ですか？
- ・参加したキッカケは何ですか？

これらの質問から、私たちの目の前にいる人々が誰であるのか、彼らが何をしに来たのか、そして何を探しているのかを知ることができました。

若者たちの考えや質問の深さが印象に残っています。誰もが人類のために何かをしたいのです。そして誰もが世界を変える一翼を担っていました。

良くするため、個々人が意志と情熱を強く持ちながら他者と真摯に向き合っているような状況です。

私たちはこれらの体験を芸術的に、（社会芸術家ヨゼフ・ボイスからの着想による）社会彫刻として行いました。

まず、部屋の真ん中に「トランスフォーム（変革）」と刺繍された青い布を敷きました。そしてその隣に、命や生活を象徴する何かの絵、例えば「子どもと母親」とか「スラム」とか「マスメディア」のイメージを置いて、それを見ながら「麻薬中毒」とか「子どもの教育」というテーマについて小さなグループに分かれて話し合ってもらいました。

次に、芸術を通してこれらの問題に変革を与



**ディープ・ディスカッション
変革は可能だ！**

ウテ・クレマー

「変革は可能である」ということを、モンチアズールでの試練や素晴らしい体験を通して学んできました。貧困街に暮らす人々が、尊厳を持って生活や仕事ができる環境に変えていくには何が必要なのでしょう。年齢、国籍などを問わない4〜7人グループを作り、床に並べられた写真についてディスカッションをしました。

えます。カラフルな羊毛、リボン、折り紙、クレヨンを利用して変革を表現するのです。そして最後に、それぞれの人に自分が行った変革の意味を伝えてもらいました。

この世の中の悲惨な問題は、もし私たちが個人として、そして他の人と力をあわせて関わるならば、間違いなく変革のきっかけがやってくることでしょう。意志を強め、日々エンパシーを強くしていきましょう！

ソーシャル・ペインティング

安部由美子

水彩による色彩の本質的な動きを通して、反感と共感を乗り越えた領域にアプローチする体験をするワークショップでした。芸術的な色彩とグループワークを通して「他人の絵に筆を入れる、自分の絵に他人の筆が入られる」体験をしました。絵の中でどのように他者とコミュニケーションをとっていくのが問われました。



体の動きを使ったバイオグラフィー・ワーク 20代で何をしますか？

樋原裕子／秋元香里

バイオグラフィー・ワークは、自分の身体で起こっていることに興味・関心を持ち、体の芯からリラックスするものです。自分の心、身体に従えば、どんな動きも完璧です。そんな講師の言葉とともに、参加者は静かに自由な動きを体感しました。20代の体験にフォーカスを当て、新たな人生の衝動、今を生きるヒントを探りました。

講師からのメッセージ

19歳から50歳までの9人が2コマを通しての時間に集いました。6人が20代です。簡単なワークショップについての説明と参加者の自己紹介の後、まずは自分の身体を聴くダンスエクササイズを行いました。自分の身体を感じることで身体がほぐれ、自分の中に存在しつつも他者に対してもオープンになれる準備となりました。そして小グループに分かれて、テーマに沿った自分の過去の経験をシェアしました。他者に自分の身体を通して耳を傾け、身体表現を通してフィードバックするプロセスを辿りました。身体を緩め、現存への意識を持つことで、他者を傾聴する意志が促された



のでしょいか、たった3時間のうちに深く他者と出会う体験があったようです。また、自分を肯定して受け止め、未来に向かう種を持ち帰ることができたのではないでしようか。バイオグラフィー・ワークは、エンパシーと変容を促すワークです。それがぐっと凝縮したような集中した、あたたかなひとときとなりました。この時空間を共に創り上げてくださった参加者のみなさんに心から感謝しています。

開会の言葉

私が見てきた世界とこれから生きる世界 吉川直人

東海大学 副学長／教養学部国際学科 教授

他者の気持ちを感じることを、すなわち共感力という観点から、慈悲(compassion)ということがどのように平和に繋がるかということをお話しさせていただきたいと思います。

私はこれまでに様々な国や地域に住むという機会を得ました。しかしそれらの地において胸が張り裂けるほど悲惨な状況を多々目の当たりにし、私は非力であるということを痛感したことも事実です。私たちが、いかに奈落に近いところに住んでいるかということ、何千年もかかって歴史的に築かれた人間社会はとも脆い状態にあり、瞬時に破壊されてしまうことを示唆しています。

私が体験した社会はとても酷い状態で、仏教でいう「末法」、あるいは「末世」と言われるような退廃したものでした。「末法」は人間が作った社会です。「末法」というのは「平和」と相對する概念であり、退廃した社会を指すものです。こ

の場合の「平和」とは、暴力や戦争がないだけでなく、人々が恐れを抱かず、生きるために必要なものが欠乏することのない状態のことです。

この世が「末法」の状態にあるということを信じるのは難しくありません。釈迦によって予言された混沌や腐敗が蔓延する状態は人間の本質的なもので避けられない運命だと考えることもできます。しかし、人間は政府といった形をとりながら指導者を通して社会を形成してきたように、どう生きるかを選択することもできるのです。私たち自身が選択し、どう行動するかを決定することができるのです。

そのような社会がどのようにしてできあがるのかという理由はわかりません。しかし一つ確かなことは、このような悲劇は人間自身によってもたらされたということ、私たちに責任があるということです。自然は時として一時的な大災害を招きますが、人間によってもたらされる「末法」という慢性的で辛辣かつ悲惨な状況とは異なるものです。人間がこの私たち自身の社会を破壊している張本人なのです。

これ以上の人間社会の退廃を進めないためにはどうしたらよいのでしょうか。私たち個人はそ

れぞれ違う意見を持ち、多様性の中で生きています。この強みを生かして一人ひとりが平和社会へ向けて貢献しようと努力すれば、それを実現することができると思います。それでは具体的にはどうすればよいのでしょうか。

その解決策の一つとしては、「共感力」が重要であると思います。私が理解する「慈悲」というのは、他者にやさらぎや幸福感を与え、痛みや苦しみを取り除くことを意味しています。一人ひとりが自分にとって何が幸福で、どういう状態が苦しみのないことかを考え、それを自分なりに考え実践すれば、誰もが慈悲の心を行動に移すことができるのだと思います。その次の段階ですべきことは、他者の痛みや幸せを理解し、自分の行動が相手にどのような影響を与えるかという他者の気持ちを理解することです。これが共感力です。

個人が持っている影響力には限りがあるので、一度に多くの人々を物質的に助けることは難しいでしょう。しかし「慈悲」の心があり、他者を助けるという認識を持ちながら行動すれば他者を助けることができる場面は多々あるでしょう。こういった行動の積み重ねによって、コミュニティ、社会、ひいては世界までも変えることができると思われています。誰にでも行動を起こすことができます。一人ひとりが「慈悲」の心をもって他者に接すれば、社会や世界は平和なものとなるのではないでしようか。

仏教と人智学の対話

輪廻転生するのは「私」なのか「関係」なのか

岩間 湛教（日蓮宗昌福寺 住職）×ウテ・クレーマー（ブラジル・人智学）



今春三月三十日、身延山でのプレフォーラム二日目、「仏教と人智学の対話」という対談がおこなわれました。登壇いただいたのは、日蓮宗昌福寺のご住職、岩間湛教さんと、ブラジルのファヴェーラ（スラム）で人智学に基づくコミュニティ活動を続けてきたウテ・クレーマーさん。

プレフォーラム前日には、ウテさんをはじめ海外から到着したゲストや参加者の皆さんを昌福寺にお連れして、一二九八年創建といわれる由緒あるお寺の歴史と、そもそもお寺が建てられた以前から地域に存在した様々な社会集団との関係について岩間さんに解説いただき、お寺の、表から見える世界と、裏にいかないと見えない世界、その両面を見せていただきました。

当日の対談では、お二人の活動についてご紹介いただいた上で、その活動を支えるそれぞれの世界観・人間観を語っていただきました。いきなり白熱したのが、人類の進化をめぐる議論でした。「仏になる」ことをめざす仏教と、霊的な進化を明確に意識する人智学、どちらも人類の進化を中心にすすえていると言えるのでしょうか。いやいや、そもそも「仏になる」のは「私」ではない、人間は他の生物や岩や塵にすら生まれ変わるのだ、と語る岩間さん。それに対して、人間の核にあたる「私」が、何回も人間に生まれ変わって進化をとげていくのだというウテさん。

フォーラムのメインのテーマはエンパシーでしたが、それを理解するためには、そもそも「私」とは何なのか、「他者」とは何なのかについて考えることが必要になります。「私」を確固とした存在にとらえるのか、「他者」との関係の中で生まれてくるものとしてとらえるのか。自分という核を意識するヨーロッパ、自分のことを他者の目で見ようとするアジア／日本。ここ一〇〇年から一五〇年ほどかけて出会うとしている二つの大きな流れ。お二人の対話は、その激突の場であったように思います。

安易な結論など生まれるはずありません。フォーラムの後も続いているお二人の対話の様子を、**岩間さんからのメッセージと、ウテさんからのお手紙、それに対する岩間さんの返信**の形で以下にご紹介します。ウテさんからいただいたお手紙を翻訳するにあたっては、ウテさん自身からお願いで**入間カイさんにアドバイスをいただきました**。そのときのやり取りも併せてご紹介します。

《岩間湛教さんからのメッセージ1（フォーラム終了後）》

……「私」をめぐるさまざまな立ち位置は興味深いですし、もしかするとこれからは、国家にしても、集団にしても、個人にしても、「他者」に対する時の「私」の多様性が、その安全と融和と繁栄に寄与していくのではないのでしょうか？ つまり「たくさん私の可能性」。だからウテさんとの対話は私にとって、「もう一つの私のあり方」の可能性の具体例となりました。そしてその「たくさん」の対他的な私の可能性が「法華経に登場する菩薩」に共通する能力の一つで「普現色心三昧（ふげんしきさんまい）」というサマーデイ（いわゆる瞑想中の極限状態）と気がつきました。きっと法華経の瞑想は、やはり一人で座っているのではなく、かならず誰かに向かった皆さんの私の可能性を展開していこうとすることなのです。そのことの価値を感じることができたのは、今回のとても大きな収穫でした。

今日、小さいグループに分かれて話し合ったとき、ウテさんから質問を受けました。それは仏教では「私」を出来るだけ解消していくことを目指すと話したことを受けてのご質問で、それならば生まれ変わりをする主体は何なのか？ という問いかけでした。

たしかに、きっと生まれ変わるには「私」という芯

が仏教も必要になってくると思います。ただ仏教の場合、最終的な目的地である仏陀に到達した時、その「私」が解消してなくなると考えているはずです。「私」が苦悩の源で、それが無くなり二度と生まれ変わらなないことを「ニルヴァーナ」つまり「涅槃」と呼びますから。逆にいうとそこまではどうしても「私」が存在するはずです。その上で私を向上させていこうということだと思います。つまり「私」の「向上」と「存在」が反比例する。そして個人的には、今こそ日本では「向上心のある確固とした私」が必要とも思っています。

《岩間湛教さんからのメッセージ2》

ウテ・クレーマーさんとの対談が終わって、じわじわと心のなかを占めてくることがあります。それは妻が後日つぶやいたことがきっかけでした。妻いわく、一番耳に残っているのは、「悪」をめぐる日蓮聖人の認識について私が触れたことをうけて、ウテさんもご自身の活動での（人間の「ダーク・サイド」との向き合い方）を話しながら、きっと日蓮聖人も自分のなかに「ダーク・サイド」が存在していることに気がついていたのではないか、ということ。

私も、そうだ、たしかにそのように話していた思い出しました。そう言われてみると、たしかに自

分のなかの仏の可能性、つまり「仏性」ということについてはよく語られますが、「自分のなかの地獄の可能性」についてはあまり語られないテーマな気がします。教義学上はそれを日蓮聖人の「罪の自覚」というようないい方で指摘される場合もあります。日蓮聖人にとって自分で自覚していた自分の地獄の面はどのようなものだったのか？ とは自分もこれまで考えようとしませんでした。

見過ごしがちなところに思わず光があたり、大切なことを気が付かせてもらえるのも「異文化の他者との出会い」のご利益かもしれません。そして自分も完璧ではないということ、時には悪もはびこるし、自分だけが正しいとその正しさを押しつけることは気をつけないと悪にもなりえてしまうということを気が付かせてくれるのも「異文化の他者との出会い」の経験なのかもしれません。

そう思うと、「わたしのなかの悪の自覚」は「善を求める者」のたずさえるべき倫理のようにも思えてきました。それにしても、日蓮聖人にとっての悪とは何だったのか？ そして私のなかの悪とは？ 興味が尽きない課題を与えてくださってありがとうございます。みなさん、または是非どこかでお会いいたしましょう!! 合掌

《ウテ・クレーマーさんからの手紙》

身延山で最も印象深かったことの一つが、岩間さんと交わした「仏教と人智学の対話」でした。仏教は人間の幸せと世界平和をなし遂げることを目指しています。岩間さんは日蓮宗の方ですが、日蓮宗というのは一般の人々が今生の日々の生活の中で仏の境地に至ることを目指しています。そしてそれは侍やエリートたちだけでなく、教育をあまりうけていないような人でも社会全体を支え、活動しているすべての人々に開かれているのです。

日蓮上人の教えに「すべての人がブツダになる可能性を秘めている」というものがあります。この言葉は人智学に大きく関係しています。人智学では、全ての人間の中に神聖なる核が存在し、自己認識や自己教育を通して、それが願望や本能などの魂の日々の活動を変容させ、それによりその人の才能や人間としての真の資質が輝くことができますと考えます。フォーラムのテーマが「エンパシー、他者を通じて自分を知る」だったように、この対話をするにあたって私たちには共通の出発点がありました。

岩間さんは、お寺での様々な行事を写真と共に紹介し、日蓮宗と、同情とエンパシーに関連して「中道」についてお話しされました。私自身はエンパ

シーについて思考、感情、意志との関連からお話しました。

- 自分のことであるかのように人の考えや思いについて考え理解する思考
- 同胞の痛みを感じる感情
- 意識的な利他主義を育みこの世界で行動を起こすため、人と協働しようとする意思

これらが、ルドルフ・シュタイナーのいう日々の生活の中でキリストと出会う三つの方法です。日蓮上人は、「瞑想するだけでは十分ではない。社会環境がより重要である。環境は私たちの行動を通して仏になるのだから」と述べています。以下に述べるキリスト衝動と、仏教の悟りの境地はお互いに非常に似ていると思います。

人智学はキリスト衝動と関連付けられます。キリスト衝動とは、特定の宗教としてのキリストではなく、信仰に関係なくすべての人が実現できる意識的で行動的な衝動としてのキリストです。キリストの隠された名は「私は、私はある、である（I am）」です。すべての人間が共有している高次の自我を指します。高次の自我は受肉することはありませんが、人が、慣例や外的な権威、伝統によるものではなく個人の自由な魂の表れとして行動した場合、その人の理想像や人生の使命として

現れることがあります。この高次の自我は人内に在る変容の力で、その人のアストラル体、本能、願望などを変える力も持ちます。

対話では、次の問いについて深く語り合うことができました。「人智学における高次の自我は悟りの境地と似ているのか」

人間の自我、もしくは高次の自我は、次の生でも人間に生まれ変わるのでしょうか。それとも、森羅万象と融合し、石や植物、動物などにも生まれ変わることがあるのでしょうか。ルドルフ・シュタイナーの人智学の精神界の研究によると、高次の自我は人間存在の本質であり、それによって人間は動物やその他の存在から区別されます。高次の自我は、個人の本来の姿であると同時に宇宙的な自我でもあります。死後、人間は霊界を通過し、自らを「浄化」します（この過程をKarma Lokaといいます）。その後、個人の魂は、意志をもって別の環境で人として生まれ変わり、カルマのつながりがある人たちに出会います。生を共にし、一緒に働くことで、自分の高次の自我により近づけるよう努力します。

岩間さんは、仏教の伝統には二つの考え方があると説明してくれました。一つ目は、自我はいつも人間に生まれ変わるという見方、二つ目は動植物や石などにも生まれ変わるという見方です。このこ

とは、次の文によく表されていると思います。

常不輕菩薩が常不輕菩薩と呼ばれるのは、菩薩がどんな人に出会おうとも、それが他の僧や尼僧、一般信徒であっても、尊敬の念を込めて頭を下げこう褒め称えたからです。

「私は深くあなたを敬います。決して軽しめたり、慢るようなことはしません。何故ならば、あなたは菩薩の修行をしていかれたら尊い仏になっていけるのですから」

人智学と日蓮宗という二つの道は、深いエンパシーの生き生きとした表現なのだと思います。社会に疎外されたもの、差別されるもの、「声のない」ものも含めて、すべての人に向けられた「行為」としてのエンパシーです。善を考え感じるだけでなく、善をおこなうのです！



《岩間湛教さんからの返信》

今回こうして再びウテさんと対話をさせていただくことで、具体的にいろいろ思考を進めることができるのは、楽しく幸せなことです。その点をウテさんにお伝えいただければ幸いです。

また、以下に書かせていただいたことが、くれぐれも批判や相違をあおるものではないことをご理解いただけますようしくお願いいたします。せっかくの対話の幸運を楽しみつつ、自己確認しながら思うところを存分に書かせていただいているとご理解いただければ幸いです。

さて、ウテさんが冒頭に共通点としてあげていらっしゃる「全ての人間の中に神聖なる核が存在し」の部分。やはり仏教は、傾向として人間存在に「核」のような実体を認めないのではないかと思っています。たとえ日本仏教においては、実際には寺などの個々の現場で、葬儀の際に「靈魂」のようなものに対する人々の意識に配慮しているとしても、です。

仏教では、いわゆる構造主義のような関係性のエフェクトとして自我を捉えているのだと私は理解しています。「空」と言われているものは、そのように捉えるのが分かりやすいかと思っています。(も

しろんあくまで私の理解であって、異なる立場をとる仏教徒も多々いらっしゃるかもしれませんが。)

では「仏になり得る可能性」、つまり「仏性」とは何か？それは高次の自我のような不変的な存在か？もちろん、そのようにも捉えられる解釈が実際ないことはありません。しかし、少なくとも『法華経』の「常不輕菩薩」は、その「但行礼拜」と「受難」をもつて特徴付けられているわけですから、「ある特定の行動」において「菩薩」であるということだと思っています。

そしてその「行動」においての菩薩「だからこそ、同じ行動を取り得るかぎり人間以外も菩薩化可能と解釈しているのではないでしょうか。(ちなみに、仏と菩薩は異なる存在のはずですが、菩薩の実践、つまり菩薩行において仏へと進んで行くので、同じ存在の before-after とひとまず受け取っていただければありがたいです。)

たとえば、私の祖父がよく法話の際に話していたのですが、次の仏教説話があります。祖父の記述が残っているので、それをここにそのまま転載してみます。

山に住んでいた一羽の鸚鵡おうちが、道に迷って奥山へまぎれこんでしまいました。夕方になっても帰る方向がわからなくて困っていたと

き、その山の鳥や、けものたちが親切に自分たちのすみかに連れてゆき、水や木の实、草の実を食べさせてくれました。そして翌日、みんなで鸚鵡を送って元の巢へ連れもどしてくれました。鸚鵡はうれしくて、うれしくてなりませんでした。

数日後、鸚鵡がふと気がつくしてみると、奥山の方が山火事です。真っ黒な煙がもくもくと立ちのぼり、ぐれんの焔がめらめらと燃えさかっているではありませんか。この間、自分をあんなに親切にいたわってくれた友だちのいる山です。

鸚鵡は驚いて友だちをどうして救い出したらいいか考えましたが、方法がありません。火を消すより外にないと思うと、鸚鵡はすぐ谷川のせせらぎに入り、からだをぬらすと、そのま

ました。

かたわらで先刻からこの有様をみていた他の鳥たちが笑いました。「鸚鵡くん、君の運ぶ

二、三滴の水があの大い山火事を消せると思っているのか。つまらぬこととはそういうことだ」鸚鵡はこのときいました。「私の運ぶ水はわずかです。火は消えないかもしれませんが、私も、私にあんなに親切にしてくれた友だちが、いまあの火の中で苦しんでいるかと思うと、たとえ消せなくても、私は水を運ばずにはいられません。私はつづけます」鸚鵡はせっせと運びつづけました。

やがて一天にわかにかきくもり、大粒の雨がふりそそぐと、さしもの山火事が消えてゆきました。みんなは、鸚鵡のまごころが天に通じたのであろう、とうわさしました。

『維宝蔵経』

この説話の鸚鵡は、鳥でありつつも菩薩行を実践し、しかも常不輕菩薩のように嘲笑や蔑視をもとめせずに実践することで、その点において鳥のまま菩薩、そして常不輕菩薩的なのだと思われま

うか。

菩薩行を妨害する「悪」にさえ、それによって日蓮聖人は末法での法華経伝道者としての条件を担保することができたので、「私を成長ならしめた」という点から「悪が悪のままでの菩薩行を行じて

こうなると菩薩行とは受益者に結果的に良い影響があれば、もしかして石ころであつても、悪であつても可能になる。つまり菩薩行に意思や主体性や、善意すらない場合もありえる。だからこそ、行動の当事者の自覚は問題にならず、人間以外のあらゆる存在も含めて行動においてその存在のままに仏になり得るし、仏でさえその行動を行えない場合はすでに仏ではなくなっている。

もしかすると「仏」とは、実体化できるものでは

なく、「現世において存在が相互に成長を促す影響作用」のことを示しているのではないでしょう

能性を秘めている」といべきかもしれません。

ただ、あくまでもこれは私の解釈ですから、他の仏教徒の方々には、異なる理解もありえると思います。それにしても、相違点は問題ではなく、むしろ「エンパシー」の現象の多様性と考えれば、エンパシーの可能性を拡大する相違と捉えることができるのではないのでしょうか。どちらが正しいというのではなく、こういう方法もあり得るとい

合掌。

南無妙法蓮華経



《入間カイさんからの訳語についての解説》

“Christ Impulse”の訳語について

キリスト衝動は、いわばアントロポゾフィーの中心となる用語なので、訳し方としては「キリスト衝動」でよいと思います。説明も、ウテさんの文章における説明が十分に的確だと思いました。ただ、おそらくウテさんが気にしていらっしゃるところは、どんなに普遍的な概念だと言っても、「キリスト」というだけで、非キリスト教文化圏の人たちには偏った印象を与えてしまうということではないかと思っています。

IASWCE (International Association for Steiner/Waldorf Early Childhood Education) という会議でも「ヴァルドルフ教育の本質は何か？」ということが毎回議論されていて、ぼくも「キリスト衝動を一般の人にも理解できる仕方で定義する必要がある」と何度も提案しました。

ぼくが提案したのは、キリスト衝動とは、すべての人の中にある「進化を喜ぶ能力」「進化に寄り添う能力」であるということです。

シュタイナーは、キリスト衝動は教養の程度や民族、宗教などの違いに関わりなく、すべての人の中にある普遍的な衝動であると言いましたが、実際

に、今の人々の中にそれがどう現れているかと考えると、「進化」に対する考え方、感じ方に現れているのではないかと思うのです。

どんな素朴な人の中にも、子どもの成長を喜び、さらには子どもや次世代が自分たちを追い越していくことを喜べる能力があります。それはいわば、個人の自我の欲求を超える能力と言えます。他方で、一部の人々に見られるように、家や共同体の名誉のために、女性や子どもを利用したり虐待したりする衝動も、人間の中には存在します。具体的には原発のような負の遺産を、未来の子孫に残して平気であることができたり、自分の子どもを私物化するような感性です。

それに対して、自分よりも子どもたちの未来を考える能力の中に、シュタイナーの言ったキリスト衝動は働いているのではないかと思います。

“I am the I am”の訳語について

ぼくの提案は、いわば直訳風に「私は、私はある、である」(I am the I am)と表現することです。この言葉には、地上における一人ひとりの未熟な自我が、実はそのまま「普通の私」であるという意味が込められていると思います。つまり、修行して高まったり、悟りを開いたりしていなくても、この私が、そのまま高次の自我なのだということです。そうで

ないと、悟りを開いた人、人格的に立派な人の自我の方が、未熟で悪に染まった人の自我よりも、価値があることになってしまいます。

ここにおいて、ウテさんがおっしゃるように、キリスト衝動と仏教の「悟りの境地」はお互いに近いところであり、文章の最後に引用された菩薩についての言葉とも重なるのだらうと思います。

最後にぼくの個人的な感想ですが、ウテさんが提示された「人間の自我、もしくは高次の自我は、次の生でも人間に生まれ変わるのでしょうか。それとも、森羅万象と融合し、石や植物、動物などにも生まれ変わることがあるのでしょうか」という問いは、西洋と東洋の本質に関わる問題であるように感じました。ぼくにとっても、アントロポゾフィーと意識的に取り組むようになった当初からの問いでもあります。

その点で、岩間さんからのメッセージはとても興味深いものでした。「悪の自覚」は、個人の自我と普遍の自我の関係に光を投じるものであるように思います。岩間さんの結びの、「そして個人的には、今こそ日本では「向上心のある確固とした私」が必要とも思っています」という言葉はとても力強く、ウテさんと岩間さんとの対話の実りのように感じられました。



ぼく自身が強いインパクトを覚えた本に『自由と実存』(丸山照雄他著、河出書房新社、1975年)と題された、戦時中の仏教徒が戦争を支持したことを論じた本があるのですが、その中に、「西洋の自由は戦って獲得されるものだが、東洋(仏教)の自由はそれに気づきさえすればすでにある状態である」という意味の言葉がありました。けれど、それを極端に推し進めると、戦争や世の中の悲惨なことも、無の境地からすれば単なる迷いであり、取るに足らないことになり、そうやって宗教家が世の中の現実を無視する口実になりうるわけです。

ブラジルのファヴェーラにおけるウテさんの活動にもつながる問題意識なのではないか、と思いました。

教育の多様性は人類の未来のために

小貫 大輔

挨拶が教える文化のエッセンス

みなさん、こんにちは！
ところで「こんにちは」という、この出会いの挨拶ですが、どこにいてもそれをしない文化はありません。しかし、体を使った挨拶のジェスチャーとなると、お辞儀、握手、キス……、文化によってこんなにも違ってくるものかと印象深く思います。今回のフォーラムでは「エンパシー」がテーマですが、挨拶のジェスチャーは、それぞれの文化が最もたいせつにする種類のエンパシーをよく表していると思うのです。

日本の文化がたいせつにすることは何でしょう。いろいろあるでしょうが、日本人と仕事をすると、何かをやってくれと言わなくても、言う前にやってくれるので助かります。それはお辞儀の教える能力だと思うのです。相手のことを、見ないでも「感じる」という能力。

ドイツ人と仕事をするときには、なぜかいつも「なぜ？」という質問がってきます。ひとの意図

を「くみ取る」ということをしてくれないというか、「自分」と「他者」の間にしつかりした区別がある。握手には、真っ直ぐな「自分」と真っ直ぐな「自分」が出会う姿があります。

ブラジルでは、一日に何回もハグとキスを繰り返します。胸と胸を合わせ、全身を使ってお互いを感じます。なんとブラジルらしいことか！ 相手とつながること、それを体で確認することをたいせつにする人たちです。

どの文化の挨拶を体験しても、その文化の一番美しいところが表現されているように思います。問題は、どの文化もその一つの美徳だけに囚われてしまいがちだということ。無意識にやりすぎてしまうのです。それが嫌だから、若者はその美徳を拒んだりもします。心をこめてお辞儀をすることを「恥ずかしい」と感じたりする。自分の文化を拒んで、しかしそれに代わるものを知らないのと、何をたいせつにしたらいいかわからなくなってしまう。

お辞儀をして、握手をして、キスをして……、

日本の多様な学校

ブラジル学校、シュタイナー学校などなど

さて、今日は、この会場にたくさんブラジルの人たちが来てくれました。多くは二〇年以上も日本に住んでいる人たちです。私に言わせれば、彼らは私たちにハグとキスを教えにわざわざ日本まで来てくれたようなものです。私たちにとって希少な「あの」タイプの美徳を教えに。ところが、日本の社会は、彼らの存在に気づいてさえいません。

日本では、外国籍の子どもは学校にいく義務がありません。そのこともあって、たくさん「外国学校」が存在します。ブラジル人たちは、一時期一〇〇校ほどの「ブラジル学校」を開いていました。私の大学は、ブラジルの連邦大学に協力して、日本でブラジル人の教育者向けにオンラインの教員養成講座を開いたことがあります。二〇五人が卒業しました。今日は、その講座の卒業生たちがたくさん来てくれているのです。

日本では、以前から朝鮮学校、中華学校、インターナショナルスクールが開かれていました。そして最近では、ブラジル学校のほかにもインド系やネパール系、様々なイスラム系の学校など、海外にルーツを持つ学校がたくさん開かれています。そういった外国学校は正規の学校として認められないので、文科省や地方自治体などほとんど何も関係をもっていません。近隣の社会との接点も少

なく、ある種の「島」のようにして存在しています。

実は、シュタイナー学校も同じように私塾扱いのところがほとんどです。非正規の学校に通うということは、公的支援がえられないだけでなく、日本人の子どもにとっては「義務教育違反」として咎められる危険もはらみます。

かつて子どもを三鷹のシュタイナー学校に通わせていたとき、私は「教育の多様性の会」という会を作って、政府にオルタナティブ教育を認めさせようと運動したことがあります。フリースクールや日本手話で教える学校など、他の教育運動の人たちと一緒に勉強会を開き、とうとう国会議員の協力をえて内閣府、経産省、文科省のお役人たちと衆議院会館で意見交換をするにいたりしました。一五〇人分の席を用意した会議室に四〇〇人ほどが押し寄せてたいへんな熱気でした。二〇〇二年のことでした。その結果、「教育特区」という制度が動き、当時一緒に運動をした学校の中から最終的に四校が正規の学校として認められることになりました。

多様な学校が出会う場を作る

「教育の多様性の会」はやりがいのある仕事でした。シュタイナー学校が、他のオルタナティブ教育の人たちと出会ういいきっかけともなったと思います。どの教育が一番いいなどという人はい

私は、人と会うときに毎回三つともやると思います。今、時代を生きることのすばらしさは、様々な文化が育んできたものを、望めば自分のものにすることができることにあります。それぞれの文化が教える美徳を、自分の魂に焼きつけるいい方法が、その文化の挨拶を実践することだと思うのです。



なく、みんな、それぞれが他にはないいいところを持っている、ということを尊重しあった会でした。でも、運動の成果としては、たったの四校が正規の学校になっただけでした。しかも、その中には外国学校は一つも含まれていません。

二十一世紀も二〇一八年になって、いまだ日本にはまともな意味で教育の多様性がありません。学習指導要領と検定教科書、学校教育法で、教育は三方から壁に囲まれています。シュタイナー学校も、ほとんどが今でも非正規の学校。外国学校はせいぜい「各種学校」という、お料理学校や自動車教習所程度のステータスしかえられません。

非正規の学校の権利を訴える運動は今でも続いています。二年前には「普通教育の機会確保法」という法律を通すにもいたりしましたが、まだまだこれからです。そんな中、私たちは四年ほど前から UNESCO エースセミナーという若者の集まりを開くようになりました。「ユネスコスクール」という UNESCO の思想に賛同する学校の生徒たちの集まる合宿勉強会です。外国学校ではまだ「ユネスコスクール」に加盟したところがありませんが、ブラジル学校、朝鮮学校、中華学校、イスラム系インターナショナルスクール、といろいろな学校を招待しています。ちなみに、シュタイナー学校からは三校がユネスコスクールに加盟していて、どれも非正規の学校です。このフォーラムにも、ユースセミナーと一緒に開いてきた学校の生徒さん、先生



たちがたくさん参加してくれています。

私たちの UNESCOユースセミナーのように、公立・私立の正規の学校、シュタイナー学校のようないかなるオルタナティブ学校、そして外国学校……、普段めつたに出会うことのない「他者」と出会う機会が貴重です。そして、その貴重な機会を「すてきな出会い」にする責任は重大だと思っています。そのときの出会いで体験した「エンパシー」が、その後の人生で「原型」のようになって適用・応用されることを想像するからです。

これからの時代、私たちは人類の未来のために「エンパシー」を学ばなければいけないことがたくさんあります。例えば貧困の問題。遠くの世界で想像を絶するような生活をしている人たちのことを、知る、感じる、その人たちのために行動する力が必要です。あるいは環境の問題。ずっと先の未来、もしかしたら私たち自身はもう死んでしまった後に生まれてくる人たちのことを考える、その人たちのために今の生活を改める、そういう力。私たちの中に、「他者」を「自分」のように感じる能力が生まれることが、なんとたいせつなことでしょうか。

でも、想像上の「他者」を感じることは簡単なことではありません。「エンパシー」は、実際に出会った人との間で学ぶものだと思うのです。体で体験したエンパシーがしっかりといていけば、それを想像上の「他者」に対して働かせることもでき

るようになる……、UNESCOユースセミナーを開くとき、私たちはそのことを意識しています。今回のフォーラムも、同じ気持ちで準備してきました。初めて出会う見知らぬ人。その人との出会いが「すてきな出会い」であってほしい。そのエンパシー体験が、これからの人生で役立つものになってほしい。人類と地球の未来にとって意味のあるものとなってほしい。そういう思いです。

エンパシーを学ぶ

文化や言語、民族を超えたエンパシーについて、私には原点となる「実存的」な体験があります。三〇年前、旅先のブラジルで、とあるファヴェーラ（スラム）の社会活動団体に出会った体験です。シュタイナーの思想に基づいて教育、医療、福祉、農業に取り組む「モンチアズール」という名の社会活動団体で、私は五年間ボランティアとして働きました。他にも、世界中からたくさんのボランティアがやって来ていて、そこはちょっとした国際ユース村です。日本人もこれまでに一〇〇人以上がボランティアにいていて、帰国後もCRIーチルドレンズ・リソース・インターナショナルというグループを作って一緒に活動しています。このフォーラムの準備も、そのグループが中心になって進めてきました。

私は、モンチアズールの何がよくてそんなに長



いことボランティアをしていたのだろう。よくそう考えます。シュタイナー思想の実践がすばらしかったからだろうか。きっとそうだと思います。でも、それだけではありません。ファヴェーラで働くということがチャレンジだったからだろうか。それも間違いありません。いろんな国の若者と一緒に過ごすことが楽しかった？ それも関係していると思います。でも、一番強烈で、一番貴重だったのは、そういった要素がみんな混ぜ合わさって相乗効果を発揮しているということだったと思います。

シュタイナー教育自身は、ヨーロッパでの実践をそのままファヴェーラに持ち込んでもおそらく役にたたないでしょう。でも、ファヴェーラで新たな実践を作っていく中で、シュタイナー教育自身が進化します。そういうことがブラジルではおきたと思います。異質なものが出会ってお互いから学ぶとき、化学変化がおきる。その化学変化の中に、私たち外国から来たボランティアたちは浸されます。自分の体でそれを体験した若者たちが、それぞれの国に帰っていきます。彼らの国にファヴェーラから移住する人もたくさん出てきます。そうして、世界のあちこちに「モンチアズールの」化学変化を体験したスピリットが広がっていく。その実感が、私にはたまらなかったんだと思います。

「教育の多様性は人類の未来のために」というの

が、今日の私のお話のタイトルでした。多様性こそが人類存続のための最大の武器だと思います。そのたいせつな多様性への芽を、学校というものが摘んでしまっているかもしれません。学校が多様性を尊重するためには、学校という制度そのものが多様性の上に成り立っていないなければいけません。私の国は、その点で危うい国です。「他者」のことを知り、感じ、行動でつながることを学ばなければいけません。でも、自分とは違うものとの出会いは、「すてきな出会い」に支えられることがたいせつと思うのです。そのような機会を作る役割があるのではないのでしょうか。UNESCOユースセミナーや、この世界フォーラムのような出会いの場には。

南アフリカの多文化学校とエンパシーを育てることの必要性

ジョーン・スリー

話し言葉の伝統を再考する

私たちは、新しい共同体が生まれるのを感じます。しかし、新しい共同体が生まれるのは、簡単なことではありません。世界で起こっている葛藤、迫害、大虐殺、不寛容という難しさも伴ってきます。予測不可能で混沌とした世界の中で、「私たちが自分自身を他者に閉ざすことなく、どうやって人と出会っていくのか」、「自分を失うことなく、どうやって他者の言葉を聴き、理解するのか？」ということが大事になってきます。

昔ながらの話し言葉の伝統が、南アフリカではまだ存在しているのですが、文化の変化の中で、ヨーロッパでは、話し言葉の伝統は書き言葉の伝統に変容されてきました。書き言葉の文化は、哲学者や詩人である作家の文化でした。「書き言葉の伝統は、もう一度話し言葉の伝統に戻っていかなくてはならないのではないか」ということが言われています。しかし今までの文化に戻るの

ではなく、絶対的なものから、相対的な世界へ変容していく必要があります。

最終形として書かれてしまったことは変更することができないので、書き言葉は絶えず絶対的なものとなります。話し言葉の場合にはいつでも変更されるし、変化していきます。しかも相対的であるということは、それぞれの言語にそれぞれの表現が相対的に存在していることになります。

書き言葉ではなく話し言葉の伝統を再考するときに二つの観点があります。

一つ目のポイントは、書き言葉だとすべて統一した言語になってしまいます。しかし、生き生きとした言語を生み出すことが、話し言葉には存在しています。創造的な活きた言葉は、演劇、映画、芸術、彫刻、今日見たような竹のアート（講師 日詰明男）で見ることができます。いまの若者の言葉にも見られますが、彼らがSNSなどで使っているのはより創造的な言葉です。

れたことになります。

しかしそれと同時に、他民族への差別が法制化されました。南アフリカの人口の四分の一は白人の子孫、末裔です。彼らがすべての権力と特権を持っていました。彼らは高いレベルの教育を受けました。

人口の大部分を占めるアフリカ系の黒人は、実は様々な異なる民族から構成されていましたが、それらを全部一纏めにして、ブラック・アフリカン（アフリカ系黒人）と一緒くたにされていました。白人と黒人の間に、カラードと呼ばれる有色人種がいました。白人と黒人の結婚から生まれてきた人や、インドとインドネシアから奴隷として連れてこられた東洋人も含まれます。一緒くたにカラードと呼ばれ、黒人よりも少し良い教育を受けていました。黒人には意図的に、基本的なことしか教えられていませんでした。すべての人が法律によって操作されていました。

一九九八年、ネルソン・マンデラが刑務所から解放されて黒人初の大統領となりました。そのときから、白人、カラード、黒人の三つについて、それぞれのアイデンティティが問われていきました。

その後の南アフリカで生まれたシュタイナースクールで、私が心がけたことは、多文化で様々な社会階層からくる人々をいかに統合するかということでした。多様な人が共生できる学校を作ろ

二つ目のポイントは、人々が話し言葉の中で言葉の力に気づくようになっていく、ということ。地球市民社会という全体性の中で、それぞれ自分が持っている言葉や文化を通じて自分独自の表現を見出していく必要があります。

自分たちの言語を通じて、自分たちの文化が持っている独自性に気づいていくことが、地球の上で暮らすそれぞれの文化、言語グループにとって必要です。

南アフリカ

混沌の世界はとても美しい。それは虹のように、いろんな種類の色で出来ているからです。南アフリカの例だと、ネルソン・マンデラは南アフリカを「虹の国家（レインボーネーション）」と表現しました。アパルトヘイトから統一社会へ変化していく中で、ネルソン・マンデラは「それぞれの民族がそれぞれの独自性を持っていることが大切だ。それによって虹ができる」と言いました。

うとしたのでした。そうする過程で、それぞれの民族が抱えていたトラウマに直面することになりました。

人種離政策、人種差別を通じて、ひどい環境に置かれていた人々は、自尊心がひどく傷つけられていました。カラードの人が持っていたトラウマは、自分が（黒人と白人の）真ん中に挟まれていたことで、どこに所属したらいいのかわからない、居場所のなさ、トラウマを感じていました。そして上層の白人が抱えていたトラウマは、「自分」が過剰にあるというのに加えて、隠れた罪の意識があるというトラウマでした。

シュタイナー学校

私が十八年間働いた南アフリカにあるマイケルオークシュタイナー学校では、ヨーロッパからのたくさんさんの支援金によって、特に貧しい黒人の子どもたちがシュタイナー学校に通えるようになりました。遠く離れた場所から通うため、バスで片道二時間もかかる子どもがたくさんいました。その子たちの生きる環境は、小さな家にたくさんの方がギユウギユウ詰めになって暮らしていて、死が身近にあり、暴力にあふれた場所でした。

シュタイナー学校に到着すると、違った民族（白人、カラード）と一緒に廊下に整列することを求められました。自分の暮らしている環境では大人と目



私たちがこれから生み出していく語りの文化は、それぞれの独自性、全体性の上で美しいものだと思います。私たちに必要なのは、文化の独自性を評価することであって、それらを一つにまとめて一つの文化を作り出すことはありません。地球市民を作り出していくために必要なのは、それぞれの文化が持っている独自性を損なうことなく評価することです。

南アフリカでは一九四八年にアパルトヘイトの法律が制定されました。ということは、人間の本性、自分と似たようなグループ、似たような言語グループの方が心地よい、という傾向が法律化さ

を合わせることを許されていない子どもたちが、学校では先生と一対一で目を合わせて挨拶の握手をする場面をイメージしてみてください。それが当たり前の子どもの子どもたちとの階級差を感じずにはいられません。その差を感じるのには、着ている洋服の違いだけではなくと思います。

シユタイナー学校で求められているのは、清く正しくあること、そして、素敵なノートをつくることでした。子どもたちは、毎日、学校が終わると貧困と暴力がある生活へ戻っていきました。私たち教師は、窃盗、盗難の問題だとか、非行の問題に日々取り組むことになりました。そういった黒人の子どもたちを、特権のあるお金持ちのシユタイナー学校へ連れてくることは果たして意味のあることなのか？という問いが私の中に生まれしました。私は彼らに良いことをしているのか？

でもその問いに答えられなかったのは、人には個人差があるからです。子どもによつては、新しい環境を自分の中に取り込んで新たなアイデンティティを生み出すものもいれば、新しいものを取り込んで自分の中に帰ってからです環境の違いに苦しむ子もいました。

大きな町のシユタイナー学校からアウトリーチして、周りのタウンシップ（スラム）に小さなシユタイナー学校を作ったらどうかという計画もあり

ので、絶えず相手との間に予測できないものが存在しています。先ほど、人との間にある生きたスペースを私たちはどのように意識するか、というエンパシーについての質問がありました。第一段階としては、まず予測できないものに入っていく必要があります。

最初のエクササイズは、他者に会うときにその人をどのように見るのか、というものです。

みなさん、周りの人と二、三人でグループを作ってください。その中で、最初にお互い出会ったとき、何を見ているのかを話し合ってみてください。最初に相手を見たときに、まず何に気づきましたか？

参加者

その人が寝ているか、起きている

かということに気づきました。

参加者

目に気がつきました。

まず目に気づいた人はいますか？ 笑っている表情に気づきました？ ボディランゲージに気づいた方はいますか？ 洋服を見た人は？ 女性だけかもしれません、靴を見たという人はいますか？（全体から笑い）

自分が人を見るときのくせというものがあって、私のくせとしては、ヒゲやメガネには全然気

ました。しかし、タウンシップに新たなシユタイナー学校を建てるということは、スラムにオアシスをつくるようなものなのか？ 逆に傷を作り出してしまふことにならないか？ ということも問いでした。

つまり、ひとつの模範的な学校をつくることで、良いことと同時に、悪い面が生まれることにもなりました。二つの解決できない問題が対立しました。



がつきません。相手を知ろうと思ったとき、相手のスペースに入ろうとしたときに、自分に何が必要だと思いましたか？

参加者

味、感性、正面から向き合うこと。

参加者

自分の知らないものを見るのに

必要なのは勇気。

黒板に書かれている四つの言葉は、勇気、開かれている（オープン）、興味、そして寛容、です。人と向き合うことで、自分自身もさらけ出すことになるので、勇気が必要になります。相手を見ることで、自分自身が意識されるということがなぜ起きるのでしょうか？ 鏡を見るように、相手を見ることが自分を見ることになるのでしょうか？

これは答えではないので、夢の中に持ち越してもらって構いません。自分自身が相手を見るときに、その中に自分を見ることはあるのでしょうか？ 問いの形で残しておきます。

第二段階では、そばの人とペアを組んでお話をしてください。片方の人が話すときには聞いて、同時に話さないでください。お互い聞き合えるようにして、そのとき何が起るのか気づいてみてください。

第一段階では、見ているときには自分のことを話す必要はありませんでした。自分について知る

ナミビアでも同じことが起こりました。私はナミビアの学校に六年間通い、先生や保護者たちと会う機会がたくさんありました。多文化の中でお互いをどう理解するか。そのことに関するしつけや倫理についての質問を、教員や保護者からたくさん受けました。そういう話し合いの場では、お互いに理解しあって同意したり、しなかったり、といったエンパシーの空間が成り立ちました。話し合いに意識的に参加しているという中で生まれる、ひとつのレベルでのエンパシーの例です。

意識的な参加と違い、無意識なところから湧き出てくる反応は全く別のものです。私たちには、この地上でのアイデンティティから気付かずに与えられているものがあります。無意識のレベルでは、それがリアクションとして出てきます。お互いを理解しきれない中で、好き、嫌いに分かれてしまふものです。無意識の反応が出てくるときに、より良い意識的な部分で対処しようと努めることがたいせつです。

エンパシーの練習

エンパシーの練習について、これから四つの方法を段階として見ていきたいと思います。人との関係を考えていくときに、自分にとって予測できないものに入っていく必要があります。私たちが誰かに出会うとき、相手のことをよく知らない

ことはあるかもしれませんが、相手にそれを伝える必要はありません。聞くことと見ることは違います。耳は外側についているだけで、実は内側にあるので、相手が自分の中に入ってくるのを許すことになります。第二段階目のところまで黒板に書いたのですが、呼吸する部分です。第三段階と第四段階もやりたいのですが、時間がないので、黒板に書いておきます。どういことが起こったかを説明していきます。

第三段階で起るのは変容、トランスフォーメーションです。自分の中に入ってくる相手の話について理解できること、理解できないことを許すという変容が起る可能性があります。その時私は非常に傷つきやすい（vulnerable）状態になります。他の人が入ってくる開かれた空間、オープンスペースを作る必要があります。

第四段階目はインテグレーション、統合。相手が自分の中に入ってくることを許す。そのことを通じて変容がおきる可能性があります。相手を自分の中に取り入れ、会話を通じてお互いに変化し合い、新しい共同体を作ることです。

時間が来てしまったのでここでやめなければいけません。ありがとうございました。

ウテさんとその仲間たちのトランスフォーメーション

ウテ・クレーマー（ブラジル・モンチアズール）×ヘジーナ（ブラジル・モンチアズール）×
ヴァヌーザ（ブラジル・モンチアズール）×大嶋敦志（日本人ボランティア）×フロリーアン（南アフリカ）

御殿場会場でのウテ・クレーマーさんの講演は、ちょうど復活祭の日曜日の朝におこなわれました。ブラジルの神話を紹介した後、彼女は続きました。

ウテ

復活祭とは、地上に降りてきた霊的な存在が、死をへて再び霊界に戻ることによって再生―復活することを意味します。これはキリスト教だけのお話ではなく、私たちすべての人間にあてはまることです。誰にでも、人生には色々な意味での「死」を連想させる体験があると思います。その体験の後、それぞれの中で新たな魂の再生・トランスフォーメーション（変容）があったことでしょう。復活祭とはそのような体験を意味しているのです。

うことができたと思います。

18歳の時、今までの体験から社会福祉と人権について学ぶ大学に入りました。ファヴェーラの住民の生活権を獲得するための運動にも参加しました。モンチアズールには助産院や学校も生まれ、他の団体や世界に向けて働きかける仕事も始まっています。このような体験を経て、今、私が生まれてきたことの使命は、「世界に役に立つこと」だと実感するようになりました。最後に私の座右の銘の詩をささげます。

健全なる社会生活とは

それぞれの人間の魂に

コミュニティー全体が映し出され

コミュニティーの中に

一人一人の魂が生きているときのこと

ルドルフ・シュタイナー

ヴァヌーザ

3歳の時、モンチアズールの幼稚園に入りました。その後、私の母はウテさんとヘナーチ（ウテさんの同僚）から幼稚園の保母さんにならないかと誘われました。母は、それから8年間幼稚園で働きました。両親からたくさんの愛を受けましたが、彼らは字の読み書きができなかったのも、知的な教養はモンチアズールから授かりました。小さい頃は、よく兄弟たちとウテさんのベッドの上で飛び跳ねて遊びました。少し大きく

では、モンチアズールの私の仲間たちに、それぞれの体験を伝えてもらおうと思います。まず、ヘジーナさんを紹介します。

ヘジーナ

私はブラジルの先住民、黒人、そしてポルトガル人の血をひいて生まれました。子どもの頃、私はファヴェーラの外の住宅街からモンチアズールの保育園に通った最初の子どもでした。当時、そして今も、ファヴェーラに対する社会の偏見は強く、私はファヴェーラの友だちとファヴェーラの外の友だちとの間に挟まれて、双方からの強い偏見の間に立たされました。その体験は其後の人生に大きな影響を与えることになりました。

15歳になった頃から、世界には価値観や文化の違いがあることに気づき、それをどう受け入れたいのかとても悩むようになりました。ファヴェーラは、ブラジル国内の様々な地域の人が移住してきて一緒に住む所だからです。

しかし、モンチアズールの文化センターで働くようになると、いろいろな国からボランティアに來た人たちと出会うことでエンパシーの能力を培

なると、幼稚園や、人形作りの工房で働く母の仕事を手伝いました。モンチアズールからは、たくさんすばらしい教育と経験を受けたので、そのお返しをしたいと思っています。

現在、私は、国内や国外からモンチアズールに來るボランティアたちのコーディネイターとして働いています。彼らの受け入れ、仕事の説明、サポートなどを行っています。モンチアズールでの活動の話は、他の人もしているので今日はこれ以上話しません。

ウテさんがよく言うのは、「モンチアズールは世界中どこにでもある社会活動の一つなんだ」ということです。私たちは、世界中の社会活動を代表して今日ここににいるわけです。

皆さんにぜひ伝えたいのは、モンチアズールのような社会活動によってトランスフォーメーション（変容）は可能なんだということです。私は、ファヴェーラに生まれ貧しい家庭で育ち、モンチアズールで大きな可能性を与えられて今ここにいます。私やヘジーナとキーコは、その変容の証として今ここにいます（涙―通訳も涙して抱き合う）。ありがとうございます（会場、大きな拍手）。

大嶋敦志

ぼくは「あつし」と言います。ブラジル人は発音できなくて、くしゃみをするときの音である「アツチン」の名で呼びました。ぼくがファヴェーラを通ると、人々は突然皆くしゃみを





始めます(笑)。僕は二〇代の頃、ミュージシャンでした。その頃頃はとても苦しかった。いつもCDを売ることを考えて音楽を作らないといけなかった。すごく苦しくなって飛び込んだのがモンチアズールでした。ポルトガル語もほとんどできないで行きました。

通訳 でも超ロマンチックな歌を一曲歌えたよね。(大嶋、ポルトガル語で歌う。会場大拍手)

大嶋 敦志 モンチアズールでは、ギターを弾いたりして音楽の力でボランティアをしました。ある時、ウテさんがブラジル人とドイツ人の若者たちを引き連れてスイス・ドイツの公演旅行にいきしました。それでぼくも連れて行ってもらったんです。

通訳 その若者たちはツアー中羽目を



外してばかりいて、ウテさんに何度も怒鳴りつけられてたんですよ。

大嶋 敦志 とにかく(笑)。めっちゃくちゃ楽しいツアーで「音楽を楽しむ音楽」というのを

人生で初めて体験しました。一緒に行ったブラジル人の若者たちは、心の底から、肉体を放り出すように歌うんです。その時から、音楽は「人を気にして作るもの」から、「自分の心を映し出す鏡」に変わりました。トランスフォームしたのが自分なのか、自分の音楽なのかわからないけれど、音楽との接点が変わりました。

ウテ 会場には南アフリカからフロリアンが来ているので紹介します。彼は南アフリカで社会活動をしている人です。昨年は、グループを連れてブラジルの「フォーラム」にも来てくれました。

フロリアン ヴァヌーザとヘジーナの話の中から、ある重要な点を指摘したいと思います。つまり、ウテさんはモンチアズールの長としてヴァヌーザやヘジーナに働くように強制したわけではないということです。彼女たちは子どもの時に、自分の行動を「選ぶ」という自由を与えられたのです。ヴァヌーザが最後に涙ぐむ姿を見て、彼女が受け取った「選ぶ自由」の深い意味を感じることができました。

しかし彼女の話の中で、私には賛同できない部分がありました。それは「私はウテさんのおかげで今日ここにいます」という部分です。彼女が今日ここにいるのは、自分に与えられた選択肢の中から

私たちは、そのインパクトを吸収して人生を変容させていくのです。ヘジーナやヴァヌーザの人生も、そんな変容の結果なのです。彼女たちは、自分たちが与えられた体験をつないでいくことで、次の世代の人たちの人生をトランスフォーム(変容)させています。頭で考え、心で感じ、そしてとても大切なことは行動に移すということです。社会は、そうして変わっていくのです。だから、トランスフォーム(変容)は可能なのです。



ヘジーナやヴァヌーザの人生も、そんな変容の結果なのです。彼女たちは、自分たちが与えられた体験をつないでいくことで、次の世代の人たちの人生をトランスフォーム(変容)させています。



人工知能（AI）と人類の進化について

講演 ニカノール・ペルラス 報告 秋元香里 バイオグラフィーク

熱の塊のような人

「彼は、教会の司祭のようだね。」

知人からの一言に大きく頷く。一気に駆け抜けた講演の最後の短い沈黙の時間、私の目には涙が溢れていた。彼の熱は会場中に伝わっていたのではないだろうか。科学的な知見を散りばめた講演は、ボランティア通訳のみなさんにとってかなりのご苦労があったに違いないが、大切なことは彼のハートから私たちのハートへと確かに手渡されていた。

彼、ニカノール・ペルラス氏は、学生時代からフィリピンで数々の市民運動を手掛け、2010年には大統領選挙戦に立候補、現在も政府機関でのアドバイザーを務める傍ら、国内外で、人々の中に本来備わっている力を使い、より良い世界を創造するための教育活動が続けている、熱の塊のような人。国際社会に大きなインパクトを与えた功績に対して、第二のノーベル賞とも称される

「ライト・ライブリフッド賞」など数々の賞を受賞している。

その彼がこれまでの活動は全てここに繋がったとして注力しているのが、「人工知能（AI）と人類の進化について」というテーマである。このような形でAIが語られることは他に類を見ない。

フォーラムでの二度の講演では、物質主義的な人間観をもとに開発され、進化するAIの危険性を指摘。ここで注意したいのは、彼はAIを否定しているのではないということ。ほとんどのAIは私たちの生活をより良くしてくれるものとして開発されているのだが、AIはたった一度でもその開発の方向を誤ると人類を滅亡させることもできる、もう刃の剣であることを指摘しているのだ。

この、より良い人間社会の創造にも、人類を破壊させることにも使える道具を手にした今、私たち一人ひとりに一体何が求められているのだろうか。

AIは人間の生み出したもの

ここで話は人類の進化へとつながる。長い歴史において、かつて人類は無意識に大いなるものと分かち難く繋がって生きていた。その後やってきた物質主義の時代に私たちは世界と分断された。そして今、私たちは意識的に再び分かたれた大いなるものや世界とつながり直すことが可能な時を生きている。

私たちはそれぞれ「自分」というものを持っている。その「自分」を押し広げ、他者と繋がり、大いなるものとのつながりを見出し、「真の自分」を生き

ることができるとはならないだろうか。

AIは人間の生み出したもの。つまり、それを作った人間の「自分」が鏡のように映し出されている。物質的な考え方を持つ人間たちがAIを開発すれば、それがそのまま投影される。真の自分を生きる者たちがAIを開発すれば、それは全く違ったものになるであろう。

世界の「痛み」を 自分の痛みとして感じる若者

ニカノールは、今、人類の集合的な目覚めが必要なのだと説く。別の言い方をすれば、AIが人類を目覚めさせる可能性を持っているということ。そのことに気づいているからこそ、彼はAIの問題に真正面から取り組んでいるのである。

彼はこれからのAIの時代を生きる若者たちに大きな期待を寄せている。フォーラムの期間中、食事の時は常に高校生や大学生のテーブルで若者たちの話に熱心に耳を傾けるニカノールの姿があった。

御殿場での講演が終わった直後、一人の高校生がニカノールの元に駆け寄り彼に感謝を伝えギョツとハグをしていた。フォーラム終了後、その



フォーラム後も世界各地でワークショップや講演をこなすニカノールの最新刊が2018年7月にロンドンのテンプル・ロッジから出版された。

"Humanity's Last Stand: The Challenge of Artificial Intelligence, A Spiritual-Scientific Response"
(Temple Lodge)

「人類最後の戦い」という挑発的なタイトルの本書には、AI開発の現状とその一方で科学的に明らかにされている人間の可能性について、そしてシュタイナーが死の2日前に語ったとされる、極端なテクノロジーの発展への警告の話なども述べられており、シュタイナーの思想に詳しい方にも、そうでない方にも事の重大さが伝わる著作となっている。現在数ヶ国語への翻訳作業が進行しており、日本語への翻訳も検討中ですので、関心を持たれた方は是非ご一報下さい。

秋元香里 (バイオグラフィーワーカー)
kaori.akimoto@kcf.biglobe.ne.jp

「今、私たちは自らの選択で意識的に世界と出会う自由を獲得した。では、その自由をあなたはいかに使いますか？」身延山での講演の最初問いかけを思い出す。

日々の生活や仕事において、自分は今この瞬間「真の人間」であるかを常に問いかけ続けていく、そう心に決めたとき、背骨に光がずっと通ったように感じたのは気のせいだろうか。

「明るい！ 周囲には常に笑いの渦が起こる。そのニカノールの大きな存在はフォーラム全体を包み、私たち一人ひとりの内に明るい光を注ぎ込んだ。」



彼女が爽やかな笑顔で感想を聞かせてくれた。「今回参加できて本当に良かったです！こんなにたくさんの人たちが世界のことを真剣に考えているなんて知らなかった。私はひとりぼっちだと思っていたので、とても嬉しいです。大学受験、頑張ります！」

実はその日の朝食中、私はニカノールから次のような話を聞いていた。

現代では、14歳を超えたらもう目覚めが始まる子どもがいる。そのような子どもたちは、往々にして周囲の理解が得られず孤独を味わうことになる。カウンセラーのところに何度通っても状況が良くならなかった子どもがニカノールと話をして元気を取り戻すことがある。その子どもたちは世界の「痛み」を自分の痛みとして感じてしまっているのだということを周囲は理解しなければならぬのだ。

ニカノール自身が若くして目覚めた人だからこそ、そのような子どもたちを深く理解できるのだろうと感じた。

自らの選択で意識的に 世界と出会う自由を獲得した

人類への深い愛に裏打ちされた強い使命感、明晰な頭脳と行動力の持ち主。そして……とにかく



参加者による寄稿

WSIF 御殿場に参加して

澁澤比呂呼 イザラ書房前代表

地上のわたしたちみんなにとって大事なお祭りが始まる

参加のきっかけは新宿オイリユトミーハウスにあったWSIFのパンフレット。笑顔の若い人たちがいっぱい写っていて、胸に聖フランチェスコのタウ十字が見えるウテ・クレマーさんが活力に満ち行進の先頭に立っているもの。二十一世紀の今を生きる地上のわたしたちみんなにとって大事なお祭りが始まるのね、と直感しました。でも自分はすでに五〇代後半。近年まれなる貴重な集いだとしても、多分ここから感じ取れる若い勢いについて行けず、気圧されひとりぼっちで孤独をかこつことになるのではないかと等々悩みました。普段非常に静かな内省の独身生活を送っているのではなさったのです。

小貫大輔さんのモンチアズールでの活動を本で知ったのは二〇年ほど昔。今回の世界フォーラムは、小貫さんやその仲間、そして東海大学の学生たちがひとかたまりとなって準備し根気よく編み上げてきたものと思いましたが、とにかく普段接することのない若さと南半球からの熱い巨大なエネルギーによい意味で驚き尻込みしていた自分でした。でもまあ、そここの気持ちを察してくれたオイリユトミーハウスの友人に励まされて、御殿場に行くことにしたのです。

エンパシーの完成形がすぐ隣で存在している

富士山が巨しく見える会場の「交流の家」に着いたときには心弾み身体も弾むブラジリアンダンスや、とてもユニークに思える竹の幾何学オブジェが展開されていました。それらを早く見たくてそわそわしつつ、受付で頂いたプログラムを見てみると、そこに書かれていた盛りだくさんの内容にまず驚き、何

にどう参加していったらよいのかと実際目がくらんでしまいました。どうみても質の高いと思われる講演内容に、同時進行する様々に魅力的なワークショップ。できることならすべてじっくりと体験してみたい、と。そして次に驚いたのはボランティアの人たちの人員数・質ともに豊富なこと。挨拶をすれば返してくれるし、分からないこと困ったことには便宜を図ってくださり、礼儀正しい。当たり前なことなのですが、これは昨今なかなか難しいことになっているのではないのでしょうか。

実は受付の方に繰り返し訊いても分からなかった自分の宿舎。地図を自分は正しく読み取れないためですが、ここの正反対の方向をどんどん行って行き止まりでUターンし、路で出会えたボランティアの方たちに連れて行ってもらいました。そしてここでもまた目がくらむような大人数での昼食。

その後はウテさん、ジョーン・スリーさん、小貫さんのお話を聞きに、まだ知らない人たちばかりの中に混じりいそいそと講演会場の講堂に向かいます。なんだか不安さ心細さが、楽しい気持ちに変わってきていました。

みなさん、ご家族や友人たちと三々五々連れ立ってあちこちの会場やお風呂に行かれるのですが、単独参加のわたしはそうも行かずいささか寂しいものがありました。もちろんそれは、しっかりとした主催者によって大きく保護された恵みの下にある、わたしのような立場のものが感じて当たり前前の小さな寂しさなのですが。ところがそんなうっすら寒い心模様の中、隣り合わせのベッドとなった京田辺の父兄の方と、少し遠い所から来られた高校生にはずいぶんな慰めを頂いてしまいました。とくにお隣のお母様の笑顔がお日様の暖かさなのです。身体の内からほっとするその存在のぬくもりに、どれほどわたしは心が温まったことでしょう。声のトーンも落ち着いて優しく、友情に満ちたもの。初対面なのにです。エンパシーの完成形がすぐ隣で存在しているこの奇跡にわたしは深い驚きを禁じ得ませんでした。

そして反対隣の女子高生は、なんともユニークな知性の持ち主なのです。通り一遍の挨拶は通用しません。よく考えて、わたしという特異点からの個性的アプローチをしないと、ふふんと退けられてしまうのです。生意気といえるのかもしれませんが、誠実で謙虚なものの見方を持つてらっしゃる、とても親切なそして心優しい十代。短時間でも彼女と話す時間の楽しいことといったら。これも今回参加の大きなギフトでありましょう。





感能力の高い日本人。南からの温風にぬくもってみな嬉しそう

講堂に着くと、壇上にウテさんがいらっしやる。ご高齢でもお元気で闊達だ。誕生日らしい、まあまああ、おめでとうございます、と内容は既に忘れてしまいましたが、お姿を拝見できた嬉しさに心の中で祝辞を独りごちていたことは覚えていています。

次にジョーンさんによる充実した内容の、エンパシーの段階的発展プロセスの解説。禅で使われる十牛図の精神深化プロセスをイメージさせられます。最後は教育者としての小貫さんのコメントと、様々なお国がらで違う挨拶と感情表現の実例及びエクササイズ。そしてハグ。暖かくて無邪気なよき感情を挨拶として交わすということ、そのような安心で安全な感情が人として豊かであることの素晴らしさ。こんな風に心の温かさを通わせあって、人はやっと日々の生活を送っていけるのではないのかな等々思いながら、会場の時折爆発するような笑いの渦に包まれつつ聞くことが出来ました。隣の方たちとの挨拶の練習と軽いやりとりも実際に行ってみます。こんな楽しい、すてきな体験を私達に与えてくださった小貫さんに心から感謝します。

さて翌四月初日のニカノール・ペルラス氏の講演は圧巻でした。一歩間違うと救いようのないAIの発展と人類の未来についてのお話です。重いテーマですが、必ず救いはあるのだと、聞いておられたほぼ全員と共通の確信を持たないように感じます。自分としては、自然人として生まれ落ちた存在が、このSF的な二十一世紀においていかにして「人間になる」ことができるのか。いかに自律し、失望やエゴイズムを体験しそして克服した深い人類的友愛で連帯していけるのかというテーマとなっています。

また小グループに分かれての分かち合いは貴重なものでした。今の笑顔になる前に、救いのない困難な過去の日々を生き抜いてきた二〇代。そして三〇代……。この祝祭的なWSIFの場にいられることを、心からみな感謝し、喜んでいるのだと感じ入りました。

愛に基づいた自由な存在へと向かう発展途上

そしてまたもとの生活に戻る切なさもひしひし伝わってきます。しかしわたしは思います。祭りは終わらないのだ、と。つまらない日々の繰り返しなどというもののほうが幻想なのだと。ウテさんのなされ

てきたことは、まさしく奇跡の連続だったのではないのでしょうか。困難と涙と絶えざる失望や裏切りを伴っての、多様性に富んだインクルーシブな喜びの日々だったと言えないのでしょうか。確かな実例が南半球で起こっています。それを今回のWSIFで確認できたことはとても大きく大きな恵みの体験でした。

このひんやりとした日本社会でわたしたちはもっと暖め合おうではありませんか、互いの心を。そして許しあおうではありませんか、互いの欠点を。アントロポゾフィーの観点で言いましてもまだ人間は完成した存在ではなく、愛に基づいた自由な存在へと向かう発展途上にあるのですから、さまざまな欠点、障がい、困難をさまざまな個別のスペクトラムで平等に抱えているという認識をわたしは持っています。

すべての人間が、もちろんすべての日本人が不完全な人間ですが、だからこそ、その認識の上で大地そのものの、植物の生命、動物の魂を優しい心をもって大切に扱わせていたかどうかではありませんか。そしてここに集ったようなこんなに素晴らしい若者たちを腐らせないこと、理不尽に苛立たせないこと、彼らを自死等の破壊行為に向かわせる鈍感さを即刻止めること。これはいかによく出来た人間でもひとりぼっちでは無理です。互いに支え合い励まし合う、そしてデジタルではなく直に挨拶できるコミュニティが必要なのではないでしょうか。

みなさん、どうされていらっしやるのかしら。寂しくしていないかしら。最終日に見た、富士山の大きかった事。あの集いの広場で大勢と手をつないで、ぐるぐる踊るように歩いたっけ。あのときのハグは暖かかったな。あのときははじけるような笑顔はいまどこでどうしている？

御殿場WSIFは巨大なエネルギーの塊の体験の記憶でした。ありがとう!!

二〇一八年十一月 澁澤比呂呼（ザラ書房前代表）

フォーラム参加者から寄せられたメッセージ

たくさんさんの感想を頂き、皆様の熱意に大変感謝いたします。

ページ数の都合上、感想文の全文掲載が不可能なため編集部独自で判断した感想文の抜粋掲載になっています。

フォーラムについて

◎ 『社会イニシアティブ』世界フォーラム、それは震災と原発事故から七年という節目に立った自分自身にとって、計り知れない希望と勇気を分けてもらった貴重な出会いでした。そして、震災・原発事故を経てもいつも希望を捨てることなく子どもたちの前に立つことができたのは、シュタイナーの人智学に触れて来たからこそ

ラムが完結しました。これからこの旅を続けていくのを確認したという意味での「完結」ですが。

ウテさんのブラジルのお話、舞う桜吹雪、ニカノールさんのスリリングな講義、ダンス、小貫さんの国際社会日本の背景の話、関さんの軽妙オイリュトミー、富士山、不思議人間・日詰明男さんのワークショップ、特大キーキ！友人知人たちとの邂逅、魔のラジオ体操……。

これから私たちに何ができるのか。何をしたい？ たくさんさんの疑問、たくさんさんのヒント、たくさんさんの光が見えました。大天使ウリエルの見守る中で、パーシヴァルのごとの勇氣を持って、私

であると、改めてその感謝を深くしました。私たちはきつと、「ひとつの人類」に向けて歩み始めなければいけないところまで進化してきたのだと思います。そこに至る一歩を踏み出すことの勇気をみんなでいただいた三日間でした。ブラジルのカポエイラに挑戦したり、輪になって歌ったり踊ったり、楽しいこと、笑えることも沢山ありました!!

毎朝拝みみる富士山の美しかったこと。少し先の、未来的国際社

会にお邪魔したような空気感でもありませんでした。また参加したいです。英語もちゃんと話せるようになりたいいな!! またみんなで集えますように。

(三〇代 女性)

◎ 言語化困難！と思うほど楽しく充実した日々でした。

小貫さんをはじめとするオーガナイザーの方々のご尽力、世界中からの参加者、ベイジョ・メ・リーガの学生の皆さんの献身的ボランティアワークなどが

結実して、素晴らしいフォーラムに。それをじっくり体験させていただきました。

人智学系の集まりは時に「わかってる人しか参加できない」という閉鎖的な面があるように思うのですが、今回は許容量が目一杯に拡がっていて「アントロポゾフィーなんか全然知らない」というような若い参加者も多かったような気がします。募集のやり方にご苦勞があったと思いますが、その風通しの良さはフォーラム全

◎ ウテさんの講演を楽しみにしていましたが、その代わりにヘジーナたち自身が伝えてくれた「モンチアズールの軌跡(奇跡)」に感動！

その成長に小貫さんたちが関わってきたこともすごいなーと思い、もっと詳しくモンチアズールのことを知りた

ウテさんのワークショップに参加しましたが、帯広の伊藤英信さんが「遺伝子組み換え(GMO)や食品添加物など食に関する問題が(それと闘うには)グローバルで巨大である」ことを車座の場に投げた際に、「巨大な敵に挑戦し続けるのは(自分たちは)無力

だけど変革は可能で

体を軽やかにしてました。若い人たちには難しい内容の話もあったでしょうけれど、わからないなり懸命に何かを吸収しようとしていた。このフォーラムではそういった若い人たちと、経験を積んだ大人たちのエネルギーが素晴らしく調和して、未来への明るさ、「希望」を感じさせてくれました。

最終日、ランダムに選ばれた五人での「振り返りの時間」は、とても貴重でした。私た

すよ」とウテさん。ウ

アズールで「目の前の子供や家族」をなんとかすると決めてやってきたことが(貧困の問題などはグローバルな問題だけど)今のモンチアズールにつながっているという力強いコメントには実践してきたが故の説得力があり、とても勇気づけられました。

(五〇代 男性)

◎ このチームのまとめは「知らない人と友達になってわかりあうためには自分の殻から勇氣を持って飛び出していくこと。そしてよりよい世界をつくるためには暗闇

ちのグループは、年代も(二〇代〜六〇代)性別も(女性三人 男性二人)それまでの体験もばら

ばら。様々な背景を持つ見知らぬ五人は、休憩などしようという気にもならず一時間半、フォーラムで感じたこと、それぞれの思いの丈を語り合いました(もっと時間が欲しかった!)。全体としての広がりのあるエンパシー、そして個としての充足感のあるエンパシー。私にとって、この時間が持てたことによってフォー

の中に小さなうそくをとすることが大事なんだ」、ということです。それをレオン君がすごく簡潔な英語と絵でまとめてくれたものが添付の写真です。

いやー、短時間でこんなにきれいにまとめるなんて、すごい、レオン君。すごい、すごい中三。

こんなに素敵な若者がいっぱいいたんだねー、日本。ほんこのイベント毎年やってほしいな、と思いました。多様性を積極的に受け入れてエンパシーの輪が広がっていくことを心から願っています。

(六〇代 男性)



● 御殿場で開催される『社会イニシアティブ』世界フォーラムに行こうと決めたことは私にとって勇気のいることだった。ここで行われるであろうことと、私の日常の仕事とはかなり相違があったからだ。私は科学者であり、分子生物学とコンピュータサイエンスが専門である。私の一日は(夜中も!)コンピュータを前にして心地よい椅子に座りコーヒーを片手に科学論文に目を通して執筆すること――

スを毎日相手にしている」と抽象的で顕微鏡の中にある微細な世界にいつも簡単に吸い込まれていく。そして同時に自分の人間的感覚も失われていく。世界とそこにいる人々への関心さえも失われていく。やがて研究のための研究と追われていくのだ。そんな時に、世界フォーラムに行くことができたのは特別の機会だった。地球のために頑張っている人々と会うことが出来る。これらの人々は発展途上国に学校を作り、新しいパラダイム(時代精神)を創造し、この時代の現実と思想に立ち向かう挑戦をしている。何が私を驚かせたか? 彼らは純粋に人々を救いた

いという欲求から動いていた。その欲求は内面から来ているのであって、誰かに命令されたのではない。それらは驚くほどの粘り強さと彼らの犠牲によつて達成される。最後に、このイベントは3日で終わったが、私がこの目で見たと、聞いたこと、そして学んだこと、エンパシーと呼ばれる尊敬と閃き、それらは生涯私の中に残るだろう。(三〇代 男性)

● 年齢その他、目に見える条件については、ほとんど気にしないで、話し合うことができたこと。「エンパシー」というテーマについて、参加者が終始、真剣に学ぼうとする姿勢だったこと。三〇〇人以上の大きなフォーラムを企画・運営して下さった皆さん、目につかないところで働いて下さった皆さんに、心から感謝しています。ともすれば、注意事項が多くなると思うのですが、とてもおそれから居心地のいい(その分、ご苦労が多かったと思います)時間と空間でした。それを保ち続けられたことに感嘆しました。(五〇代 女性)

● 私は英語が苦手なので、なかなか海外の人とはコミュニケーションがとれないが、それでも良かった。通訳が入ることで時間が倍かかり、もう少し聴きたいなと思うものもあったが、通訳もハートフルでとても良かった。またこんな機会があるのかな? とも思うほど素晴らしいものだった。時間もきっちりでないところも良かった。(四〇代 女性)

なキーワードを受け取りました。これは私が日本の屋久島という小さな島で生きながら最近感じていたことと、ゆるやかなコミュニケーションの仲間と話していることとリンクしていて、世界中でこういう考えや動きが起きている事実に深く感動しました。地球という星の上で離れていても繋がっているということを感じることができる体験でした。兎に角今でも魂が感動しています。あれからなにか大きなものを守らている安心の感覚が続いていて、その一方娘がT H E日本社会の小学校入学して、心のカオスもありますが、これも変容の前のカオスだと受け

入れ楽しむことができています。

(三〇代 女性)

● 中学生にも色々な意識の高い生徒達がたくさんいる事、言い尽くされているかもしれないが、受け身でない学びの行動は重要であるということ。

(五〇代 女性)

● その場が相手(社会)を思いやる気持ちにあふれていて、自分の生きる視野のちっぽけさを感じた。

原発事故避難者として狭い視野で社会問題の裏をつく言動ばかり探していました。が、純粋なところを持つ若い方と、世界的にこの問題を注視しているゲスト(ニカノールさん等)にこの問題を

シェアし、受け入れてもらったことで難しい活動家ばかりのワークシヨップではなく、ゲストが関わりたい(簡単にいうと楽しそうだな)と思わせる視点が必要だと強く感じました。

(五〇代 男性)

● このフォーラムに参加してみて、印象的だったことは俗にいう「日本らしさ」が見られなかったことです。私の中の「日本らしさ」とは空気を読むことが得意で、自分の意見を皆の前で言うことが苦手という印象があります。しかし、このフォーラム、特に、ワークシヨップやクリエイティブな出会いではそのアクティビティ担当の人

の話を聞き、それに従って自分たちが動くのではなく、そのアクティビティに参加している人々が互いに意見を言い合い、自分たちでアクティビティを作り上げ、クオリティも高めていきました。私は、もしかしたら私の意見が否定されてしまうのではないか、という恐怖心があり、話し合いの中で発言するのはあまり得意ではありません。しかし、このフォーラムに参加したことで、たとえ誰かに発言を否定されようとも、自分自身の発言や意見は、話し合いの中において、決して無意味なものではないのだと気づくことが出来ました。(二〇代 女性)

● 若者のパワー。愛は国境を越える。モンテアズールのウテさんや、小貫さん、それらにかかわる人々の熱と継続性の大切さ。多様性の大切さ。バイオグラフィーワークの可能性。

(五〇代 女性)

● 年齢層の幅が広く、年齢関係なく交流することができ関わる事ができた。日本語が通じない相手に囲まれて、お互いの共通点を探すゲームがとても印象的でした。

友達ゼロから始まって、気づけばたくさん友達ができていました。(高校生)

● ウテ・クレーマーさんの活動とお話に

● 私は英語が苦手なので、なかなか海外の人とはコミュニケーションがとれないが、それでも良かった。通訳が入ることで時間が倍かかり、もう少し聴きたいなと思うものもあったが、通訳もハートフルでとても良かった。またこんな機会があるのかな? とも思うほど素晴らしいものだった。時間もきっちりでないところも良かった。(四〇代 女性)

● 自分の持つて生まれた特性に気づき生かし喜びで生きること、自分を持ちながら他者と調和していくこと、(社会活動や教育の場でジャッジではなく認めてサポートしていくこと、そん

感銘を受けました、私たちが子どもたちに保障したい「学び」の権利とは、学校でおこなわれる教育のみを指すのではなく、安心できる生活や文化的な体験など様々なものを含んでいるということをはっきりと認識することができた気がします。(三〇代 男性)

自身のトランスフォーラムについて

● この数日間で見えるトランスフォーラムがあったとは思われないし、今後は見据えたときに、このフォーラムが目に見える分岐点になるとも思わない。でもこれがあったからこそ、自

信を持つて今自分が信じて進んでいる道をもう一歩先に進めるんだと思うのです。信じた道(モザイクアートのように一つ一つのいのちが輝く世界をつくる)について、歩みを止めない、というアクション。(三〇代 女性)

● このフォーラムに参加したことで、私はもつと他の国の人と関わって自分が世界のために出来ることをたくさんチャレンジしようと思いました。私がこのように思えた理由は、様々な国の人と触れ合い、交流した事で、自分が関わることの大切さを学べたと共に、このフォーラムに参加する前に比べても様々な種類のキャン

プやイベントに参加したいと思いました。

● 私は問題の起きている現地に行つて、現地の声を聞いて何が必要なのか、何を求めているのか、実際に自分が何が足りないと思うのかなど、行かなきゃわからないことを実際に行って感じたいです。

(二〇代 女性)

● 周りで起きていることに向き合うほどに不安感や恐れを増長させ、世界への信頼感を少しずつ失っていたことに気づき、それを回復する方向に向かうことができました。講義とワークショップに参加するたびに、魂が回復して元氣になっていきました。

● 今まで、社会で起きている問題についてには取り組んでいてはありますが、さらに確信を持って、また、「エンパシー」を意識し、一人ひとりと向き合う気持ちで取り組みを続けたいと思います。

(五〇代 女性)

● 参加者、身延山のパワーを感じ、心を解放できた。人や物事を否定的に捉えないことの方が体にも心も魂も楽になる。どうしても理解できない人、事柄にはどうしてそうかんがえるのかな？というところから始める。

まず、否定することではない形で自分の中に落としてから友人、家族と共有し、周りに

も一歩ふみだしていき。

(四〇代 女性)

● 本当に素晴らしき三日間でした。年齢文化多種多様な人々が集まり、自分を持ちながら他者と繋がりが合う心地よいエネルギーを終始感じていました。この感覚をもっと広げていきたい。主催者のみなさま、細部までサポートして下さっていた関係者のみなさまに心から感謝と御礼でいっぱいです！ありがとうございます！

(三〇代 女性)

● 結果は出ていませんが、変容したい、という気持ちが芽生えたことは確かです。きっかけは、関わった

ワークショップ(原発問題)だけでなく、食事の時の会話や、風呂などでの日常会話などにより初めての人とのかわりを積極的に行うアクションを求められたことが大きいです。視野の広がるワークショップが満載でした。

(五〇代 男性)

● ウテさんのお話の後に聞いた「私たちが子どもに与えられるのはチャンスだけ」というお話。そのチャンスを(私たちが思うように)はつかめない人もいるのは悲しいことでもあるが、「教育」という営みが子どもたちを支配し、かえって苦しめる営みとならないためには、私たちは自らの無力さや子どもへの愛の裏側にある支配欲を常に自覚する必要がある改めて感じました。

もへの愛の裏側にある支配欲を常に自覚する必要がある改めて感じました。

(三〇代 男性)

● 三日間の事でしたが、自分がとても開かれた感じがしています。

(五〇代 女性)

● 全く知らない人同士でコミュニケーションを取ることが当たり前前の状況下では思っていたよりも色々な手段で伝えることができると思いました。

● コミュニケーションを取ろう！と頑張るよりも自分の器を広くして、相手を受け入れる心を持つことが重要。その上でコミュニケーションを

取ることが大切。それを、ピオダンスと最終日の五人で話し合うワークショップで学びました。人の見方や関わり方が分かったように思います。日本人同士でも、日本人と海外の方とでも。

● これからの社会を担っていく私たちが考えていかなければいけない問題はたくさんあると思いました。学校の授業でも、このような問題について考えていきたい。

● 世界的に心の広い人が増えたらいいな。

● そんな活動を知り機会をもっと学校で行うことができた方がいいな。

(高校生)

● 今回のフォーラムに参加して、すごく勉

強になったことや初めて知ったこと、大きく変わったことなどはあまりないと思っています。ただ、その中でも、日本や世界には自分が知らなかっただけで、社会について真面目に考えることができる一般の人がいるんだ、ということを知りました。また、これはプログラムとは関係ないですが、

同年代(千代)の様々な背景を持つ人と知り合えたことは、僕にとっては大きなことでした。普通だったら会うこともなかったはずの色々な人と出会えるのは、こういった大きなイベントのメリットなのではないかと思っています。

(高校生)

● 僕がフォーラムを終えてまず思ったこと

とがとても内容が濃かったなという事です。全員が真剣に一つ一つのテーマや講義、活動などに意識を向けて取り組んでいた

ので、普段だったら少し恥ずかしいと思うことも、真剣に、積極的に取り組むことが出来たし、二人ペアな

どの一対一のコミュニケーションが必要

な場面でも、相手の方々はとても真剣に自分の話を聞いてく

れるので、自然と会話も弾み、言語は通じな

くても相手の話に真剣に、しっかりと目を

見て聞くことが出来ました。これは全員が

今回のテーマである「エンパシー」を意識

していたから出来た

ことなのかなと思いました。

国も言語も人種も異なる人達がこのフォーラムでは全員

平等に、対等にお互いを尊重しあっていた

ことが僕の中では一番印象深かったです。特に印象に残っているのが、カポエイラを

している時でした。カポエイラは必ず二人で行なうので、アイコ

ンタクトを取りながら互いに息を合わせ

て踊る必要があります。例えば言語が通じな

くても一瞬にして相手の距離が縮まり、

仲良くなる事が出来ました。僕にとってこの体験は言語だけがコミュニケーショ

ンではないということを実感できた自分



ブラジル 『社会イニシアティブ』ユースフォーラム参加報告 西原里依

「この流れをブラジルにも拡げていきたい！」日本で世界フォーラムが開かれた後、モンチアズール・コミュニティ協会以下、モンチアズールからの参加者が中心となり、ブラジルでも「エンパシー」をテーマとした『社会イニシアティブ』ユースフォーラムが8月24〜26日に開かれた。

日本からは東海大学のスタディツアーの学生や現・元モンチアズールボランティアなど約20名、ブラジルからは会場となったオリゾンチアズールの若者や職員、ドイツ人ボランティア、ブラジル各地の社会団体からなど総勢約百名が参加し、初日の夜はフォホーなどブラジルダンスの歓迎会で盛り上がった。

フォーラム2日目

スライドを使い日本のフォーラムの報告がされたあと、ブラジルの楽器作りやコーヒーの焙煎、インディオアートの版画彫りなど10ほどの分科会が「エンパシー」のテーマの下に行われた。この日一番印象的だったのは夜に行われたランタンウォー

ク。画用紙に思い思いの切り絵をして、ロウソクを入れランタンを作る。この日はフォーラム参加者だけでなく、近隣の子どもたちやお父さんお母さんもいっしょにその地域を練り歩いた。オリゾンチアズールでは18年前からの恒例行事なのだそう。決して裕福ではない地域であり、電灯もまばらな暗い細い路地やガタガタの石畳、道なき道を、ギター、パンデイロ、トライアングルの楽器隊に合わせて約200人が大声で歌いながら2時間ほどその地域を廻った。その晩は霧が濃く、200mほどのランタンの灯列とファヴェーラの電灯の灯りが幻想的に浮かび上がって、「もしかしてこのまま異世界にでもつながっているんじゃないか!」と思うくらい夢のような美しい光景をうみだしていた。力強い歌声に何事かと顔を出す子どもたちにそれぞれ自分たちが作ったランタンを渡し、言葉を交わす。私たちの通った道の跡にはボツボツあたたかい光が灯っていく。フォーラム参加者だけでなく、その地域全体にエンパシーがゆっくりと拡がっていくことを体験した時間だった。

フォーラム3日目

この日の講演はモンチアズール育ちのヘイナウドによる「緊急時の教育活動」について。ヘイナウドは戦争や災害にあった地域や国で子どもたちの心のケアを行なっている。イラクやガザ地区などの紛争地域、ネパールやメキシコ、フィリピンなどの地震災害にあった国、そしてブラジル国内。実際に体験した生の体験談や、衝撃的な体験をした小さな子どもたちの写真に胸が痛む。そこで出会った心にトラウマを抱えた子どもたちの様子、リズム遊びや身体を使った遊びを子どもといっしょになって思い切りする様子を分かりやすく、力強く語ってくれた。

そんなヘイナウドが最後に披露してくれた「バナナの遊び歌」。いつも現場で子どもと歌うというそのパフォーマンスは庄巻！スピードがあつてユーモアがあつて、小さな子どもの心を一瞬で鷲掴みにしてしまうような「バナナ！食べて！バナナ！出る!（お尻から出る!）のくだりも私たち大の大人だってゲラゲラ大笑いで歌って遊んだ。なんてエネルギー!! 彼が被災地域にもたらすエネルギー、それをうけて子どもたちが遊びを通じて生み出すさらなるエネルギー! それが癒しにつながるんだということを身体全体で実感した。

想像もつかないような過酷な環境で活動しているヘイナウドに、ずっと答えが出なかった問いを聞いてみたいと思った。



「エンパシーを他者に感じると、その人の悲しみや苦しみを感じてしまつて、自分がどうしてもしんどくなつてしまう時があると思う。そんな時どうするの? どうやって自分を強く保っているの?」

ヘイナウドは「それはすごく難しい……でも身体的に余裕をもつことも重要だよ。もしあなたが余裕がなくて子どもといっしょに悲しくなっていたら子どもはもっと悲しくなってしまう。」よく寝てよく食べる、つまり「よくある」ということが大事なのだ。自分自身にいったい何ができるのかと考えたりもするけれど、物事はもっとシンプルなのかもしれない。

普段は日常生活でいっぱいいっぱいの頭がモンチアズールに来てからずっと他人のことを考えていた。会ったこともない遠い国の人のこと、まだ生まれてさえない未来の世代のこと。どうしたらみなにとって幸せな社会になるのか。自分に何ができるのか。この3日間が常にエンパシーであふれていた。食堂ではいつも愛情たっぷりのごはんとおやつでお腹がいっぱいになったし、ふいに待ち時間ができるとみなが退屈しないようにと誰かが即興で遊びを入れてくれたし、日本の学生とブラジルの若者は言葉が通じなくてもお互いに通じ合っていた。うまく言葉にはできないけれど、フォーラムからの帰途にいったとき、お腹もまんたん、頭もまんたん、心もまんたん、エンパシーもまんたん、そういう清々しい気分だった。

『社会イニシアティブ』世界フォーラムの これまで、そしてこれから

安藤 将

本フォーラムは2000年にウテ・クレマーさんとトゥルース・ゲラテスさんがアメリカで出会ったことに端を発しています。二人は出会う以前に、それぞれウテさんはブラジルで、トゥルースさんは南アフリカの貧困地域で人智学教育をベースにして『イニシアティブ』の活動を始めていました。

二人の活動が似ていたこと、そしてこの活動が決して容易ではないことから、それらが他の未だ知られていない活動者への「エンパシー」となり、世界各地で独自に活動している人を集めて知見の共有と啓発を促すことを理念とするフォーラムの原案ができました。

それから二人はそれぞれ、ブラジルと米国で地域の活動者たちを集め、この『社会イニシアティブ』世界フォーラムを開きます。その間、原案の一つでもあった、フォーラムを人智学の発祥地スイスのゲーテアノムで開催することを提案します。それが初めて叶ったのが2012年のColloquium(研究・討論会)でした。2015年に人智学協会主催の第1回フォーラムがゲーテアノムで行われ、その後2016年にインドで、2017年にブラジル・モンチアズールにて南アフリカの団体と共同開催で行われています。

そしてみなさんと共に作り上げた2018年の春に日本、その後、夏にはモンチアズール(57ページを参照)で、10月には再度ゲーテアノムでルドルフ・シュタイナー教育・芸術友の会と人智学協会の共催で行われました。

10月19日から3日間行われたこのフォーラム、テーマは「Ethical Individualism(倫理的な個人主義)」今回は共催がボランティアを世界に派遣する団体だったため、参加者の多くは世界各地でボランティアを終えて帰ってきたばかりの若者たちです。そしてワークショップリー

ダーは世界各地で活動を主催・運営する人たちでした。モンチアズールからヴァヌーザ、そして多くの南アフリカの団体代表が来ていました。

3日間のフォーラムは目紛しく進行了ました。朝7時半の朝食から夜10時に始まる懇親会までびっしりです。初日ジョン・スリーによるオープニングレクチャーの後、パレスチナ人でシリアで難民生活をしていて今回の紛争で二重難民になったピアニスト、Acham Ahmadのコンサート「Music for Hope」が開催されました。彼は爆撃を受けた街中にピアノを持ち出し、悲しみに暮れている市民に向けて演奏したのです。本人も被災者でありながら他の人のためにイニシアティブをとって活動をした人です。日本にも招聘されて広島でコンサートをしています。

翌日からワークショップと全体会のプログラム。活動紹介の中で南アフリカのNGOの話も印象に残りました。貧困地域でお酒やドラッグの中毒になってしまった思春期の若者たちにハンドクラフトの作業所を開設して若者たちの才能を開発している団体です。活動対象の青年は劣悪な家庭環境のもと学校をドロップアウトして路上で生活する若者で、多くは文盲だそうです。その彼らがクラフト作りや芸術作業の訓練の結果ものすごい才能を発揮する。この活動の始まりはシュタイナー学校の物理の先生です。若者の可能性を学問だけで評価するのではなく、他の違う才能をも秘めて生きているのだということを実証することが活動を始めた理由だそうです。

夜にはモンチアズールのメンバーによるブラジリアンダンスもありました。フォーラムとは社会活動という分野に特化したお祭りなのかもしれません。ボランティア活動を終えたばかりの若者たちが語る経験談は自信と誇りに満ちて輝いていました。

来年、2019年のフォーラムはエジプトのコミュニティ-SIKIMで「未来への教育(課題)」をテーマとして行われる予定です。2020年はケニアのスラム地域開催するという話も進んでいます。

ウテさんとトゥルースさんの地域で行っていた活動が世界に広がっています。経済に仕切られ物質至上主義になってしまった世界から人間の精神性を取り戻す、そんなフォーラムが定着していくことでしょう。



第4回 “社会イニシアティブ”世界フォーラム 2018年3月29日ー4月2日

主催

「社会イニシアティブ」世界フォーラム2018実行委員会
ゲイテアヌム精神科学自由大学社会科学部部門 スイス

共催

CRI チルドレンズ・リソース・インターナショナル 日本
モンチアズール・コミュニティ協会 フラジル
東海大学 日本
東海大学国際学科 日本
ベイジョ・メ・リーガ 日本

協賛

一般社団法人バイオグラフィワーク・ジャパン 日本
バイオグラフィワーカーズジュビター 日本

後援

身延山大学 日本
日本シユタイナー学校協会 日本
イオナ財団 オランダ
開発のための未来財団 ドイツ
ルドルフ・シユタイナー教育芸術友の会 ドイツ



組織委員会

ウテ・クレーマー
ジョーン・スリー
小貫大輔
関倫尚
貴家勝宏

ワーキンググループ

青山蓉香
安藤将
稲谷千妃呂
内村真澄
大嶋敦志
川原翼
西原里依
橋口博幸
星久美子
持留ヨハナ
アンドレア・デ・ラ・クルス
ネルソン・アヴェエーラ
ホアン・ファクンド・ポテロ

ワークショップ講師

秋元香里
安部由美子
内田佳子
宇野朗子
浦上裕子
小貫早苗
角口さかえ
小林由香
関倫尚
竹内真弓
角田萌果
天鼓
日詰明男
樋原裕子
松本夏樹
宮田文子
アンドレア・デ・ラ・クルス
ヴァヌーザ・コウチーニョ
ウィルソン・リマ
ウテ・クレーマー
ジョーン・スリー
ネルソン・アヴェエーラ
ヘジーナ・ラッセ
ヘンリー・サファイア
ホアン・ファクンド・ポテロ
マンデラ

演者

岩間湛教
小貫大輔
斉藤大法
はたりえこ(舞台名 はたりえこ)
日詰明男
吉川直人
ウィルソン・リマ
ウテ・クレーマー
クリスチアン・グレッツインガー
ジョーン・スリー
ニカノール・ペルラス
マンデラ

通訳

内村真澄
白石玲子
寺尾昭彦
高橋沙織
浦上裕子
愛澤ジョゼー
小貫大輔
青山蓉香

報告書作成委員会

青山蓉香
安藤将
小貫大輔
川原翼
西原里依
橋口博幸
星久美子

カメラ

田村連

記録

澤村成美



2018年度「UNESCOユースセミナー：海洋プラスチック問題と私たちの生活」の集合写真

2015年度のテーマは「未来の学校」、2016年度は「多様化・多文化化する日本の学校」2017度は「多様性とインクルージョン」、2018年は「海洋プラスチック問題と私たちの生活」でした。

また、それらの活動の様子を紹介する冊子『ユネスコスクール・ネットワーク』の発行にも協力

CRIは東海大学の教養学部とコラボして、2015年より毎年「UNESCOユースセミナー」を開催してきました。

ユネスコスクール認定校や加盟希望校、シユタイナー学校、外国学校、インターナショナルスクールなどの高校生、大学生、留学生や卒業生などが1泊2日で集い、それぞれの学校の教員も交えて「多文化共修」の形で交流を深めています。



毎年発行している冊子『ユネスコスクール・ネットワーク』

「UNESCOユースセミナー」の開催 — CRIと東海大学教養学部とのコラボ —

今年は特集号として『多文化共修のためのワーク』文化、言語、民族を超えて共に学びあう「地球市民教育」アイデア集」を小貫運営委員と星（事務局代表）が執筆しました。



General Anthroposophical Society Anthroposophy Worldwide
人智学協会会員世界ニュースレター英語版



Das Goetheanum
人智学協会週間会報誌(ドイツ語のみ)

CRI - チルドレンズ・リソース・インターナショナル (英語名: CRI - Children's Resources International) について

CRI は、ブラジルと日本の両国で生きる子どもたちの「子ども時代」を守り、支援することを目的とするグループです。CRI という名前には、「子どもたちのための国際資源」という意味があります。参加するメンバーが、それぞれに自分の持つ能力、知識、情報、時間、資金などを「資源」として提供しようという会です。1988年の創設以来、主にブラジル、サンパウロ郊外のファベラ（スラム街）でシュタイナー教育・医療・農業をベースに活動するモンチアズール・コミュニティ協会を応援してきました。現在は、この協会でもボランティアとして働いたことのあるメンバーたちが中心となって会を運営しています。日本でも、モンチアズールでえた経験をいかして、ブラジルなど海外にルーツのある子どもたちの支援に力を入れています。

CRI 会員の募集

CRI では、活動を支援して下さる会員を募集しています。それぞれが可能なリソース（資源）を持ち寄るという考えから、一定の会費を定めていません。ご参考までには、多くの会員の皆様に年に 3,000 円～ 5,000 円を振り込んでいただいています。継続した活動を可能にするために、毎月 2,000 円（年間 24,000 円）、5,000 円（年間 60,000 円）と決めて振り込んで下さる方もいます。CRI の会員となっていた方には、活動の最新情報を載せた「くりあんさブラジル通信」を年に 2 回お送りさせていただきます。

会費納入方法

■ 郵便振替

口座番号 **00200 - 9 - 62458**

加入者名 **C.R.I**

*郵便振替で送金いただく場合は、通信欄に「CRI 会費」などとメッセージをご記入ください。

■ 銀行振込【ゆうちょ銀行からゆうちょ銀行へ】

記号 **10120**

口座番号 **61790761**

口座名 **C.R.I**（シーアールアイ）

■ 銀行振込【他行からゆうちょ銀行へ】

振込先 **ゆうちょ銀行 018**（ゼロイチハチ）店

口座番号 **6179076**

口座名 **C.R.I**（シーアールアイ）

*銀行振込で送金いただく場合は、事務局から返信できるようにメール、ファックス、郵便などの方法で連絡先（住所など）をお教えください。「くりあんさブラジル通信」をお送りさせていただきます。

連絡先

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1
東海大学国際学科気付 小貫大輔研究室

FAX: **0463 - 50 - 2407**

e-mail: **criinfo@cribrasil.org**

HP: **www.cribrasil.org**

Facebook: **www.facebook.com/cri.montezul**

CRI 主催・共催のイベント（2018 年）

1 月 21 日 ウテさん招聘のためのファンドライジング・レクチャー（於：横浜シュタイナー学園）

1 月 31 日～2 月 1 日 ポルトガル語合宿（於：御殿場）

3 月 18 日 ウテさん誕生会 / モンチアズールのためのファンドライジング・ランチ（於：バーゼル / スイス）

3 月 25 日～4 月 14 日 モンチアズールからの訪問団の受け入れ

3 月 29 日～30 日 "社会イニシアティブ" 世界フォーラム / 身延山会場

3 月 31 日～4 月 2 日 "社会イニシアティブ" 世界フォーラム / 御殿場会場

5 月 10 日～13 日 モンチアズール・インターナショナル年次総会・カルチャーデイク合宿（於：ウルム / ドイツ）

7 月 1 日 CRI 年次総会

7 月 31 日～8 月 1 日 UNESCO ユースセミナー（於：東海大学湘南キャンパス）

8 月 8 日～9 日 マルチカルチャー・キャンプ（於：東海大学湘南キャンパス）

8 月 27 日 第 1 回「彩とりどりのはだの」多文化共生教育と子どもたちの未来についての勉強会（於：秦野市本町公民館）

8 月 25 日～26 日 "社会イニシアティブ" 若者フォーラム（於：シャカラ / モンチアズール / ブラジル）

10 月 19 日～21 日 "社会イニシアティブ" フォーラム（於：ゲーテアヌム / スイス）

12 月 8 日 ユネスコスクール全国大会ワークショップ「多文化理解、多文化共生をどう進めるか」（於：横浜市立みなとみらい本町小学校）

運営委員会（2018 年度）

代表 **川原 翼**

運営委員 **青山 蓉香 / 大嶋 敦志 / 小貫 大輔 / 橋口 博幸**

『くりあんさブラジル』編集委員会

編集委員 **安藤 将 / 稲谷 千妃呂 / 西原 里依 / 橋口 博幸 / 星 久美子**

事務局

代表 **星 久美子**